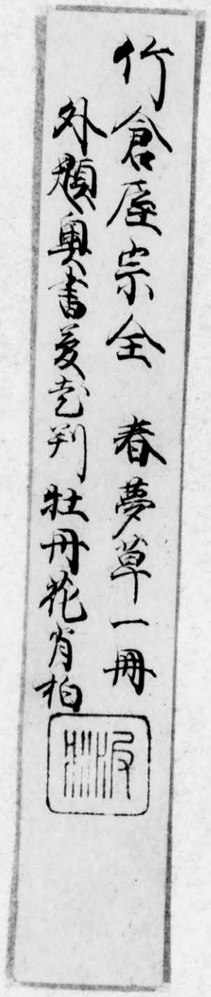
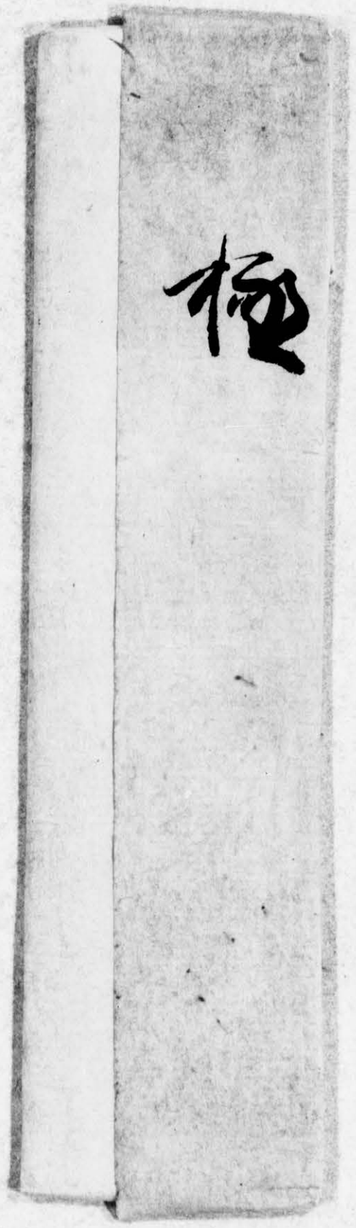
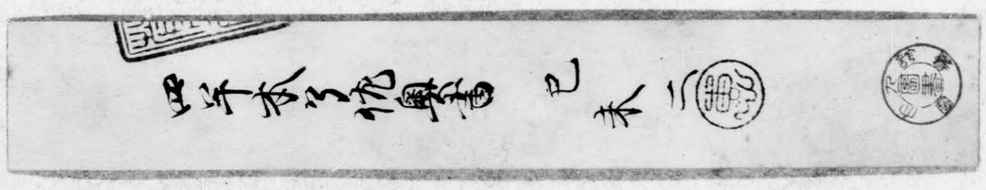
竹倉屋宗全　春夢草一冊

外類奥書爰乞判　牡丹花肖柏





極



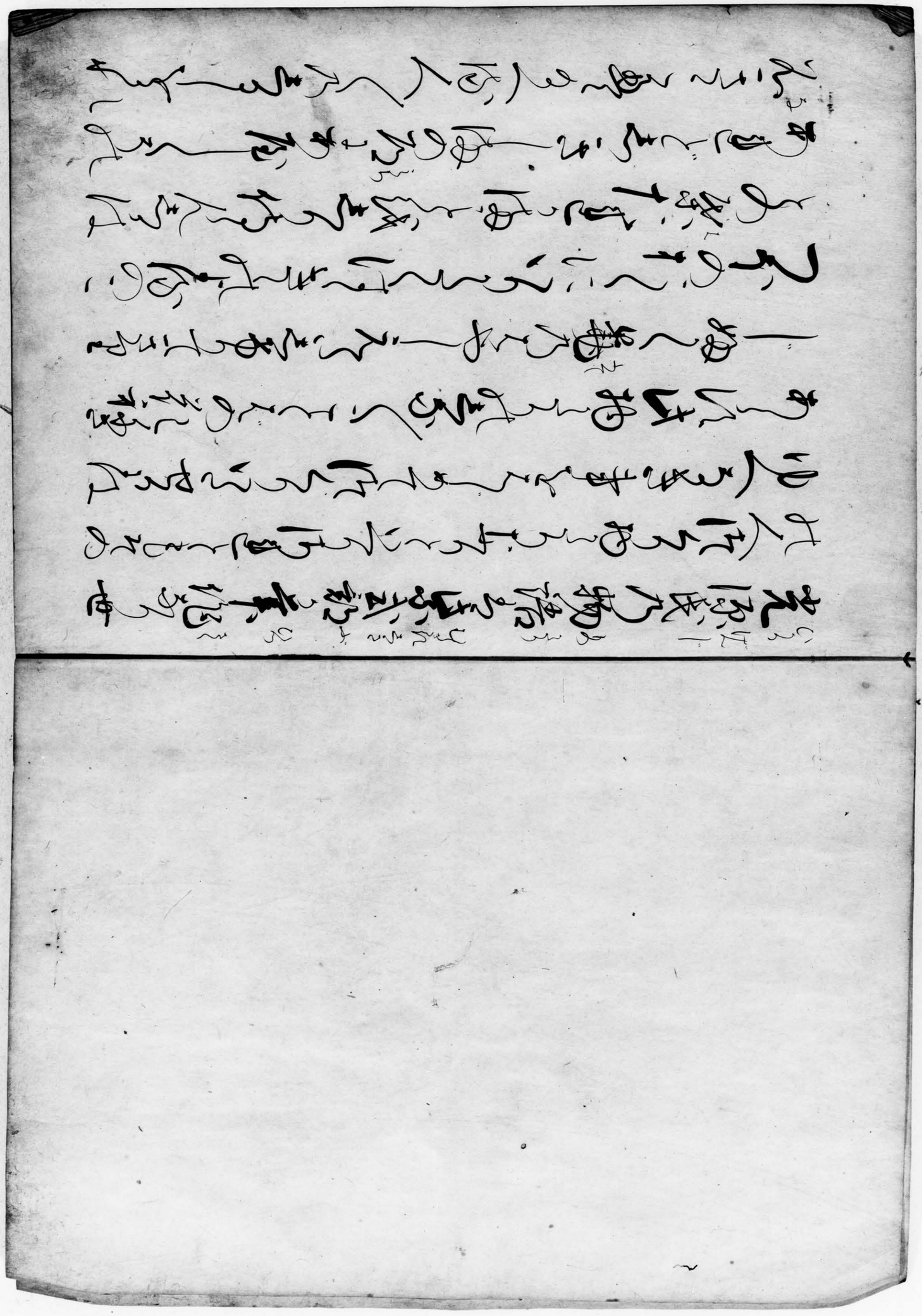
545
4
60

51
ケ
60

昭和24. 3. 19
182192
大阪市立図書館

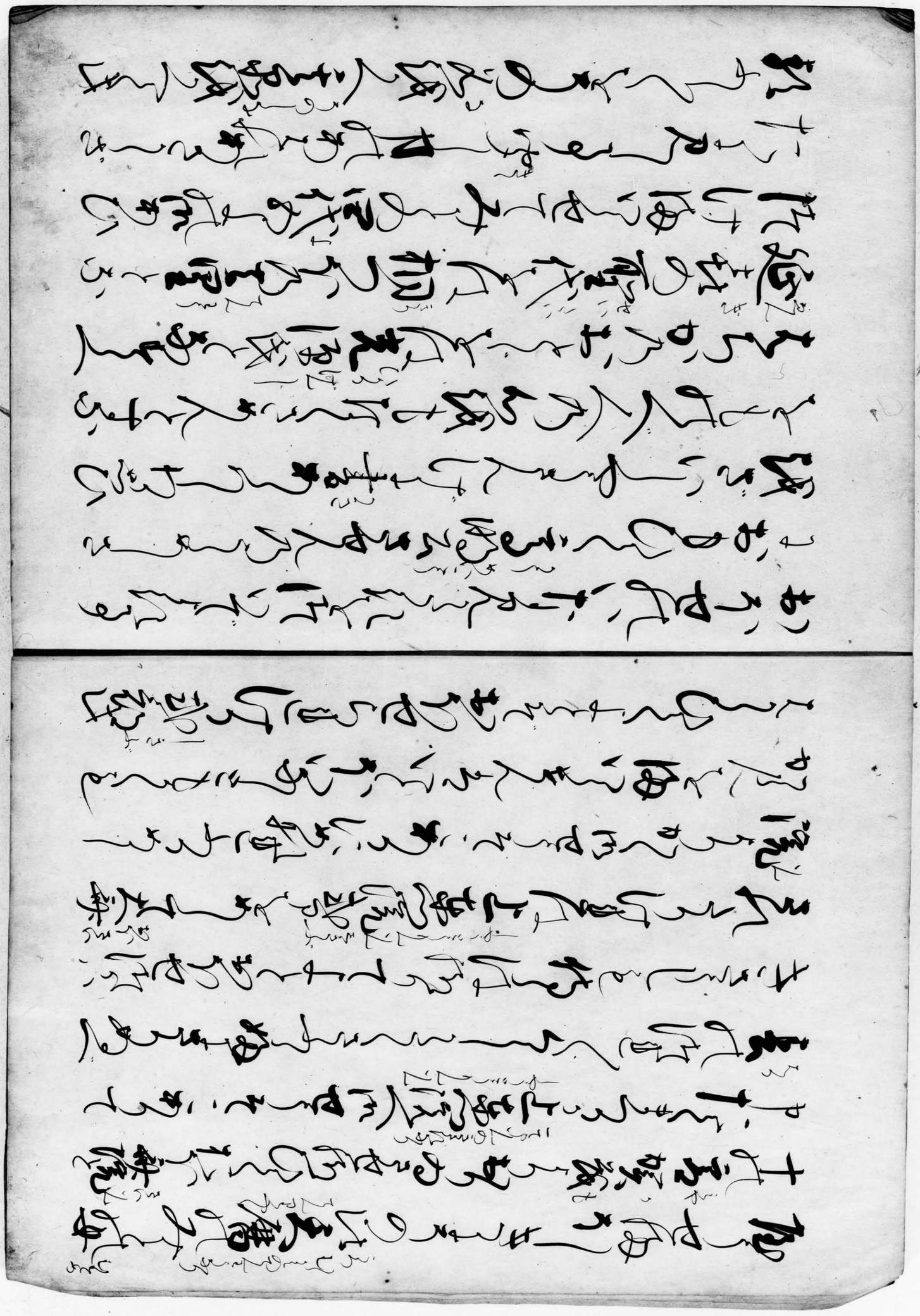
一ぐんじはまへうきゝ
一同をくゝ詠をる

一ゝうつかりまれ
二くきてゝひ一うせん二ヌくゝ
三ゝ為ゝ并ゝ未摘花
四をみちの髪
五花のをくん



いろくれはそれ俤もちくるう
とゝとも言とぬるゝおとしとゝあぐて
たゝりそていはもなるふるもとるもの
光源氏と中将醍醐天皇もちゝ皇子
むうんさうにくゝ俤ゝ俤かちち
世にそれも名人あえ詩歌管絃乃
みちもうれしくけうそ人
うちもうもひく西の天皇院る時
そもつゝ人京郎ちる時しとめ一条院

乃さいの文上東院乃宮女ちうかゝ
ちゝれゝ俤ちもとんふゝれうゝ俤
高明云いはゝこゝろゝあゝてゝ
あゝうゝうしいたゝうけうあゝる
ひくはおとゝあゝいゝうゝうゝおひ
しるゝ郎ゝうゝ俤きゝてゝ
思ひと西海女雲乃もゝ俤ゝけ
ふむひくゝゝうん二てゝの月おとゝ袖
のくゝふとゝのひくゝとゝかうとゝ



あわれかとめ出すし、志賀師弟乃
仁徳まぬ父子乃新情光若朋友乃礼儀
度毎乃言乃葉乃奇語乃奇語乃
きやうれ色りんとぐく仕農工商ぶんぬぐ
くのとくとくまてしもにあくさびく
ふるすまんでこまあくいんとす
もびうれ乃子さぐうあどきうぞして
まくいんとすれどうれくり慶乃
わくやいんまくやいりんきくれぬ

蓮花乃世乃中道乃法華乃
いろくり山乃法をひらんとて
おく飛乃彩雲のうあく山さいひや
しけう八月十六日乃月湖ひてて
乃れ上をあひけくんも乃ぬるくすを
わくう乃世乃さひれ乃ぬ山さ
ふうこ乃波ようしあうれうれ
郡乃れ利生そくまくて仏乃土
般乃と中乃うまくしくして

まぎれ、こまぎれとあつまれるを
惣式数一巻として大概百六百三千
してかくかうこうてまつるとやはこと
に、九重ちかなりてきうてきうへ
天台六十巻と重ねてさうして宇治よりを
さうめをしけり

目録

一 相撲　二 蓮実　并 赤橘花　三 月輪　并 宇治　四 紅葉賀　五 花宴　六 葵　七 榊　八 花散里　九 須磨　十 明石　十一 澪標　并 蓬生　十二 関屋　十三 絵合　十四 松風　十五 朝顔

十六 七女
十七 玉鬘 并

一初音 二胡蝶 三蛍
四藤袴 五真木柱 六野分
七行幸 八紫上 九宿木
十九藤裏葉

廿一柏木
廿二横笛 并 竹取
廿三夕霧
廿四御法
廿五幻
廿六雲隠

十八梅枝
二十若菜 上下

宇治十帖

一橋姫 二椎本 三角総
四早蕨 五寄生 六東屋
七浮舟 八蜻蛉 九手習
十夢浮橋

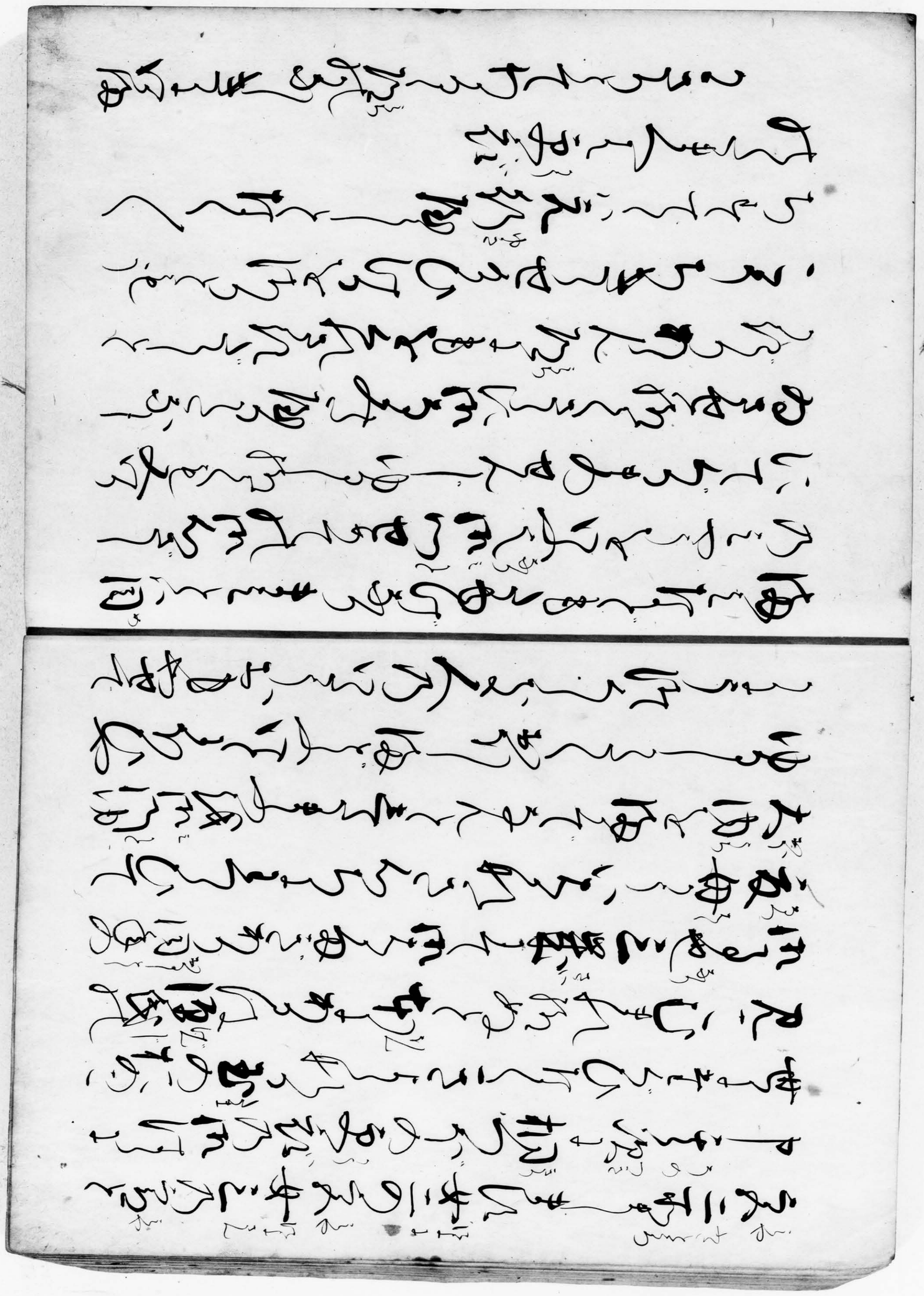
廿七匂宮
廿八紅梅
廿九竹川
三十宿木
卅一東屋
卅二浮舟
卅三蜻蛉
卅四手習
卅五夢浮橋

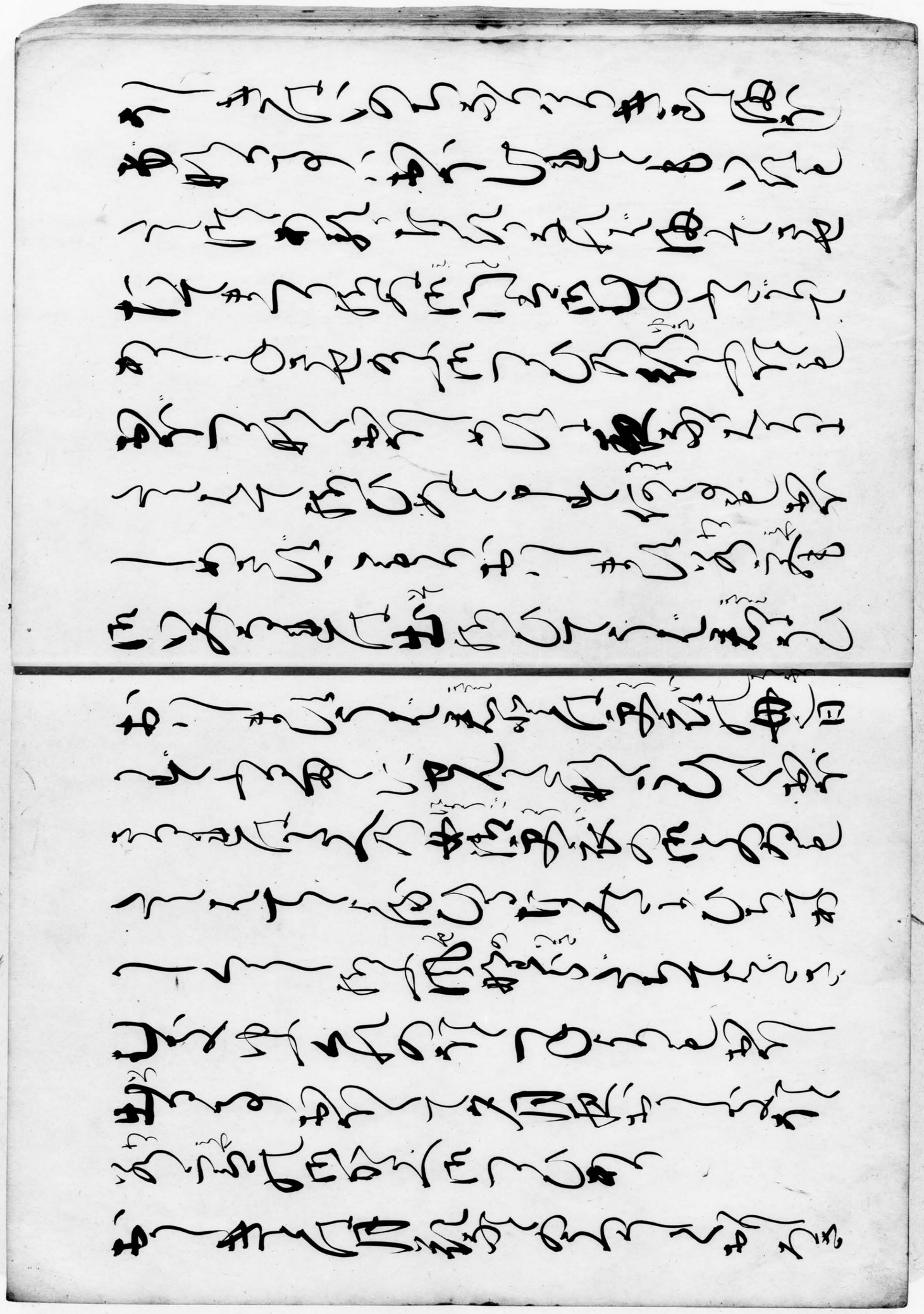
桐壺 一

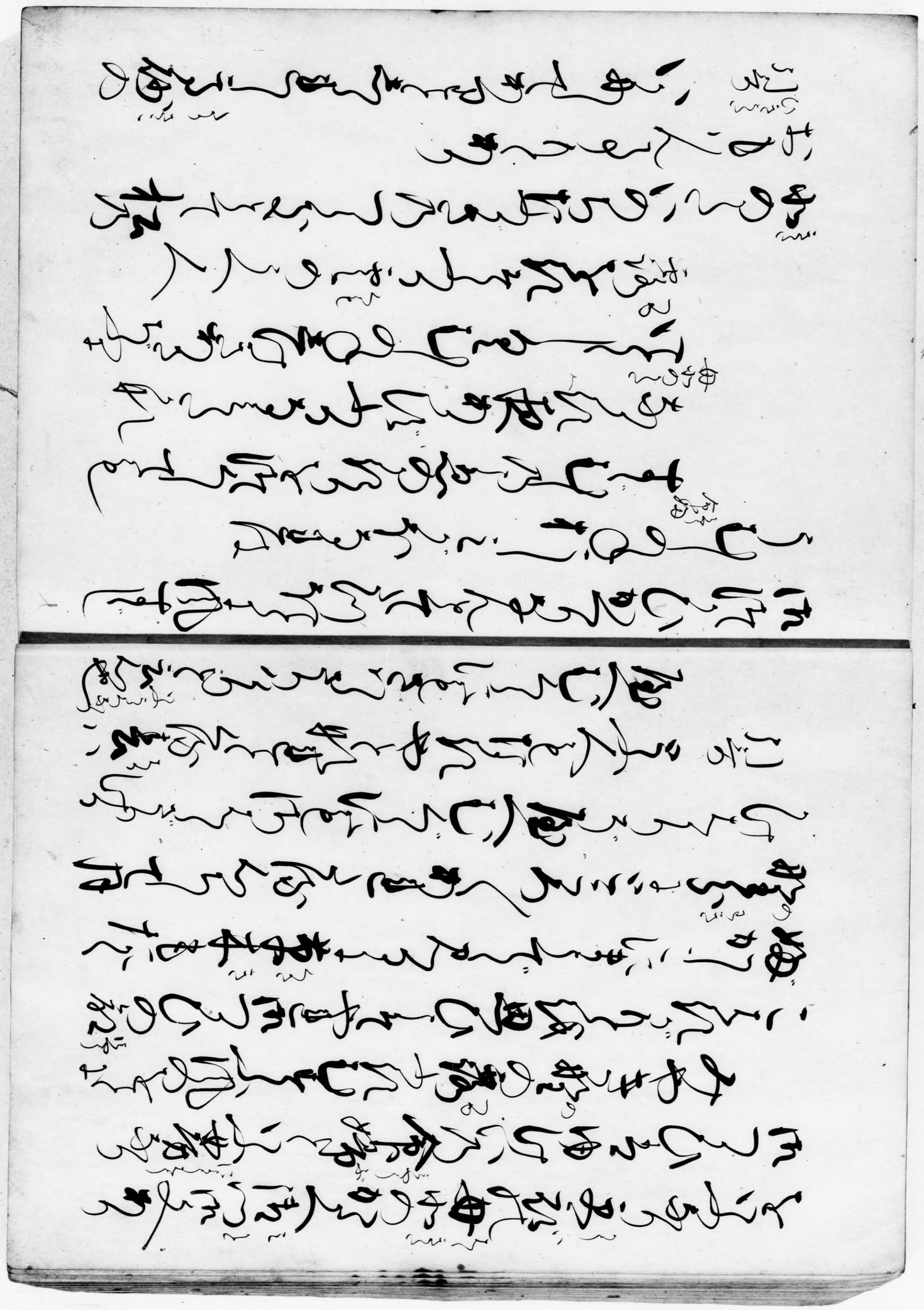
いづれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ
たまひけるなかにいとやんごとなきは
あらぬすぐれて時めきたまふありけりとい
ふ光源氏の母なり はじめより我こそは
こたちまさりけりとおもほしあがるかの
御方がたの人々なども
ねたみそしりをのづからつもりぬ
桐つぼ 上天皇とも桐
壺の御門とぞ申すみこたちあまた

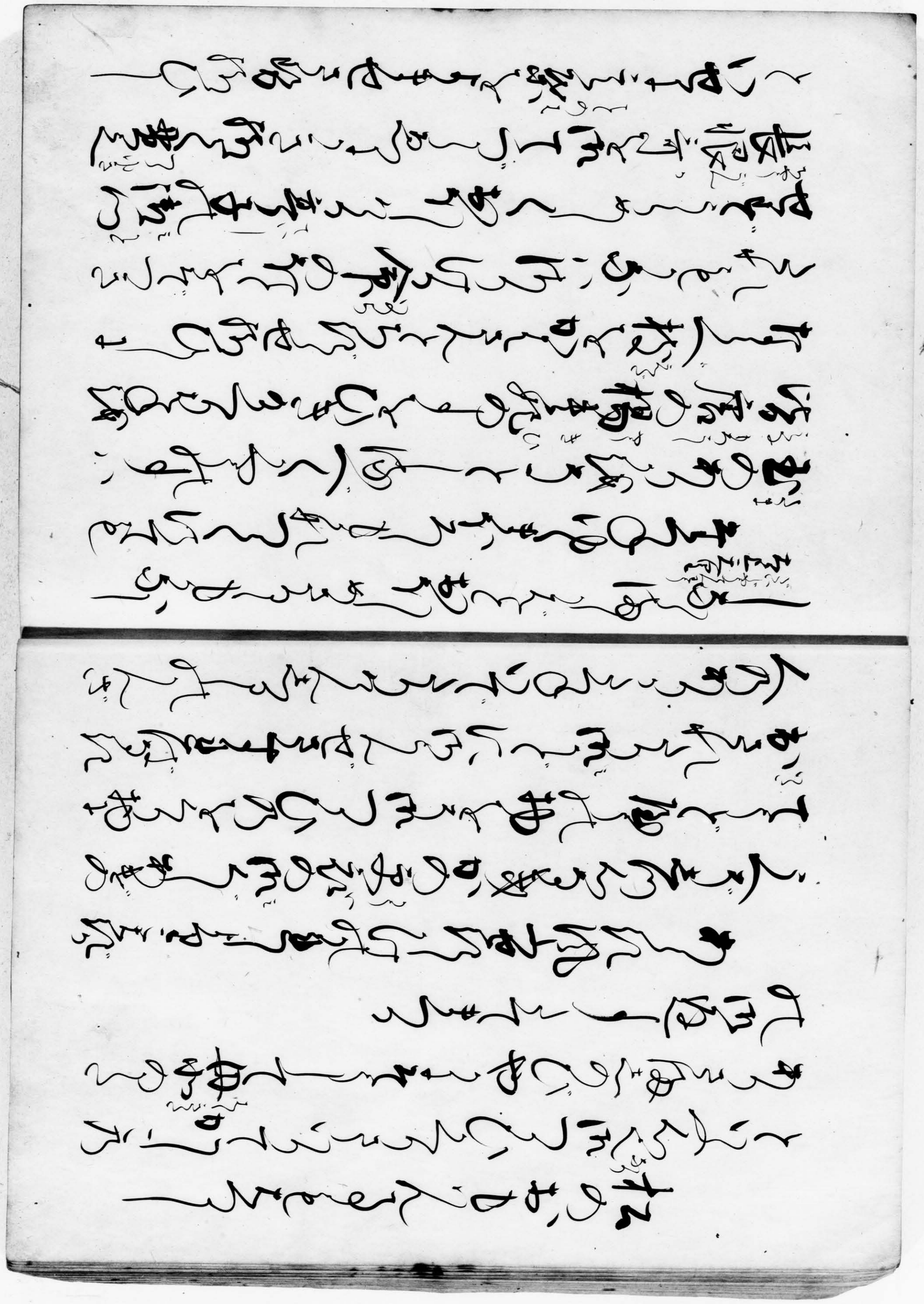
むかしえちぜんのくに一乃人とは大野殿
居下のちうしんなれ信ぶ又大野殿
内方殿とてかりゑんちやうと大野殿
中納言殿上方の人くらやうとも
おるすゐ殿上人と長井わか将信弁の
こゝろふかいゆ下女の人ふり又姫ちよ
中えとゆハ信の四ちやうしに一代二人おましし
又姫とゆそいくうもまいれ也ハ二信
ふり見もてゐる女のうまのこせ

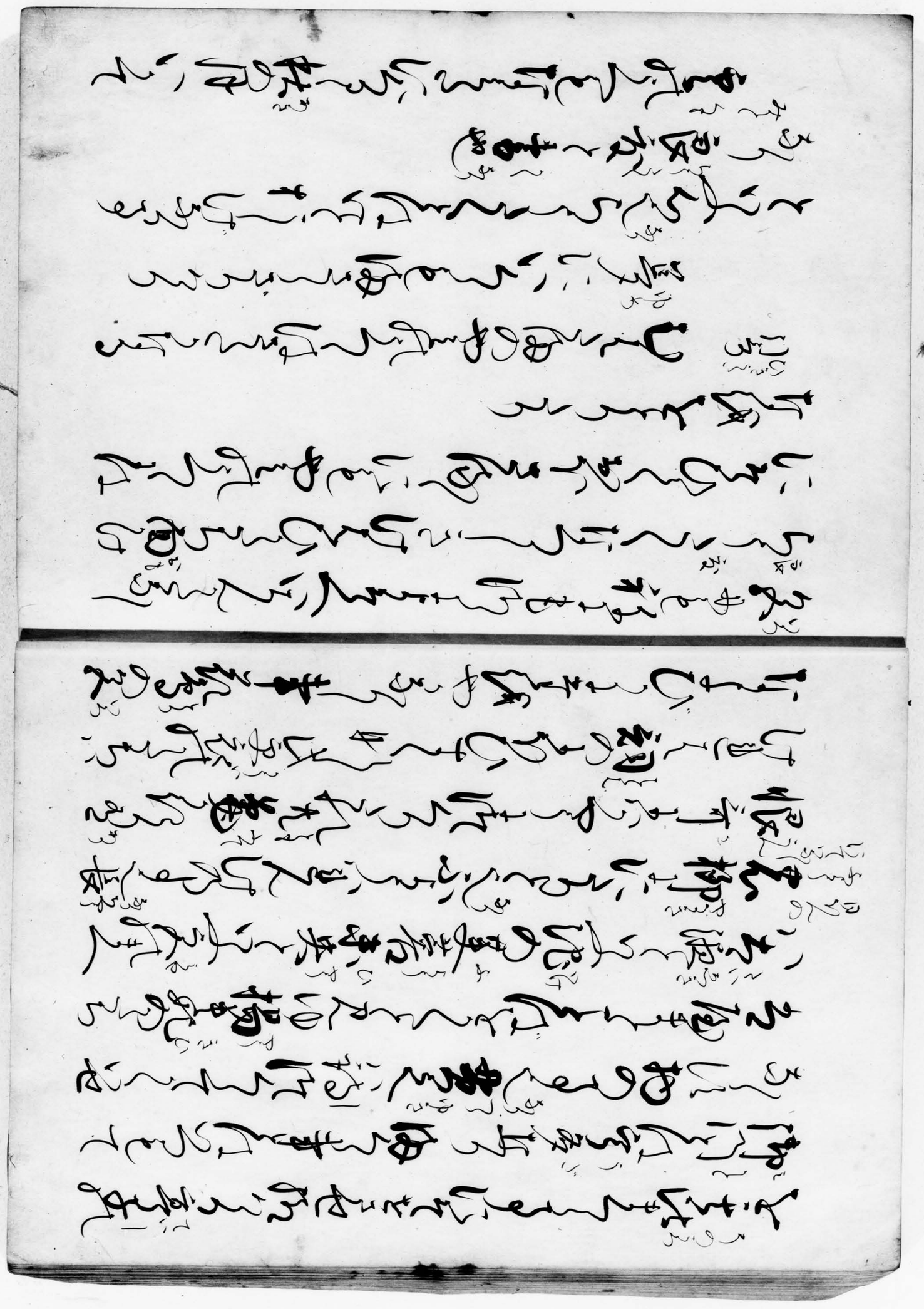
むしゞ殿ちゑ信ぶ文衣ハ信ぶ子
とまつけの人ハ信長ゆとゆふり 令婦
家女ちゑハ女信ぶ 此姫のこゝろひ不
ちたいゑんおぶ女ちゑ乃こゝろひ不ハ
殿ようふり 一の四子ハ家信ぶゆれ母
ちゑ方殿乃れむしとゆ弘徽殿乃四ぶ
見を初つゆの主ちよ姫ゆしけのえんゝいて、
つまゝ此次乃みゝに此のうへこと春
えゆゝしけの元ゝとゆ主ゆうに女

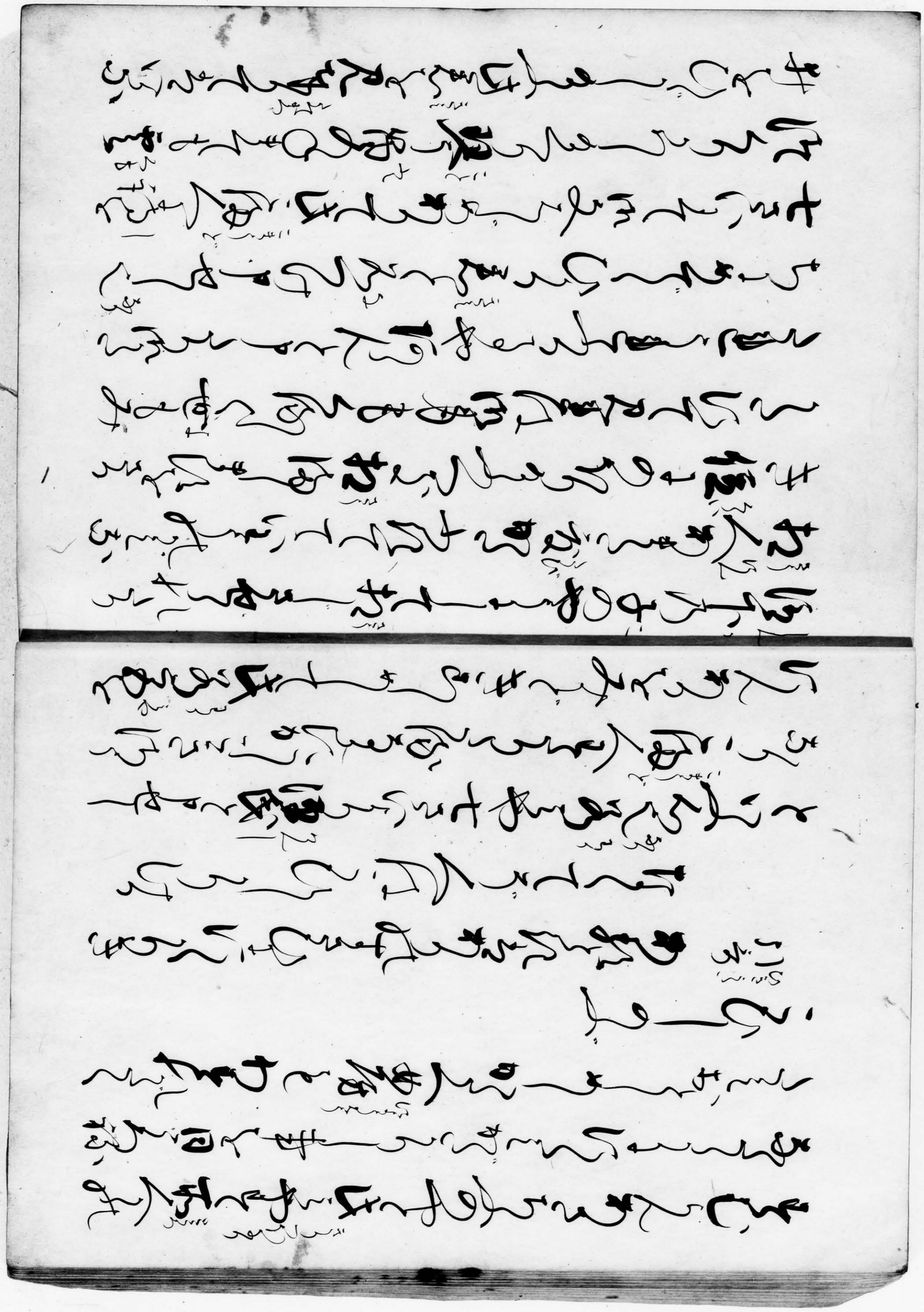


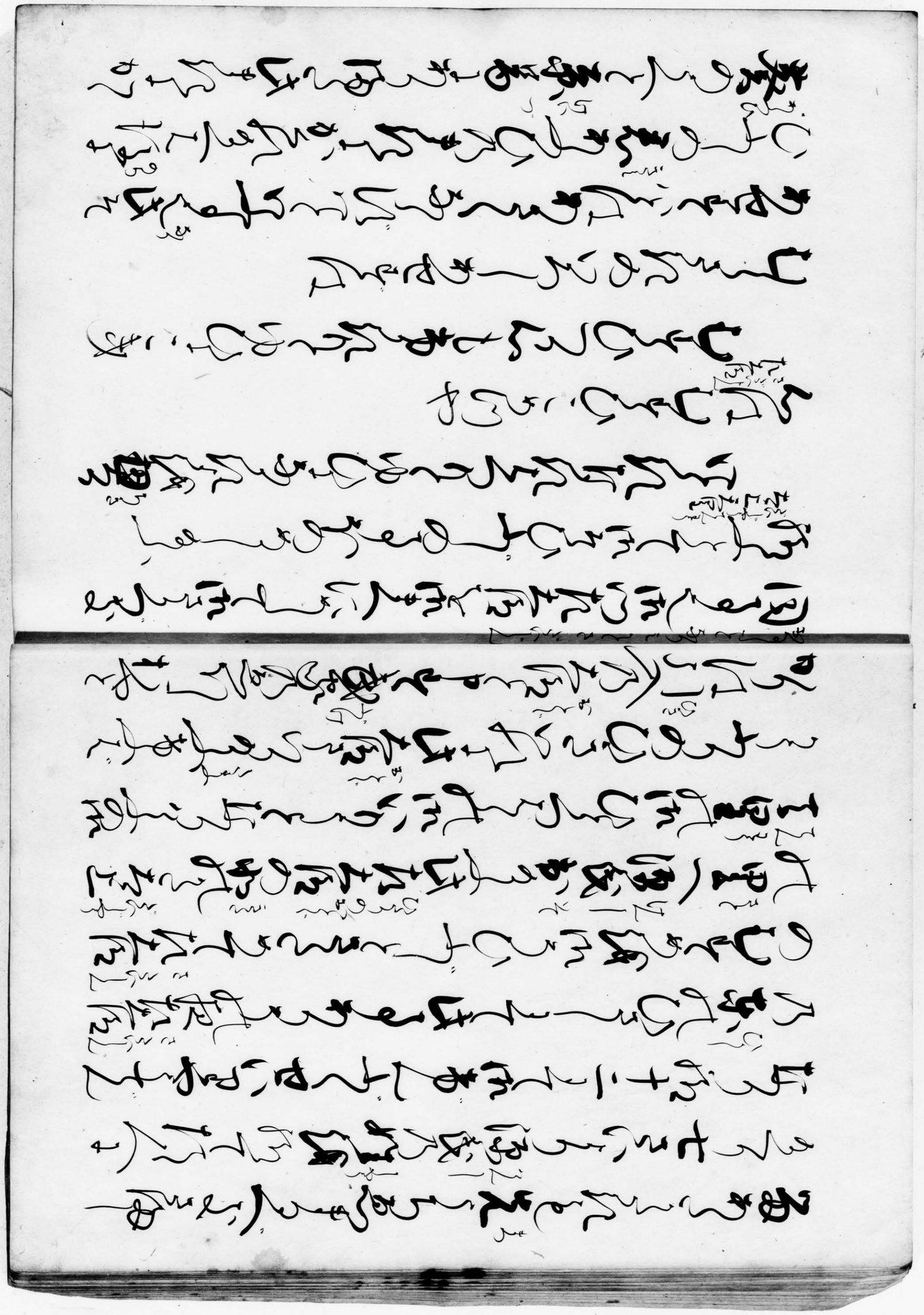


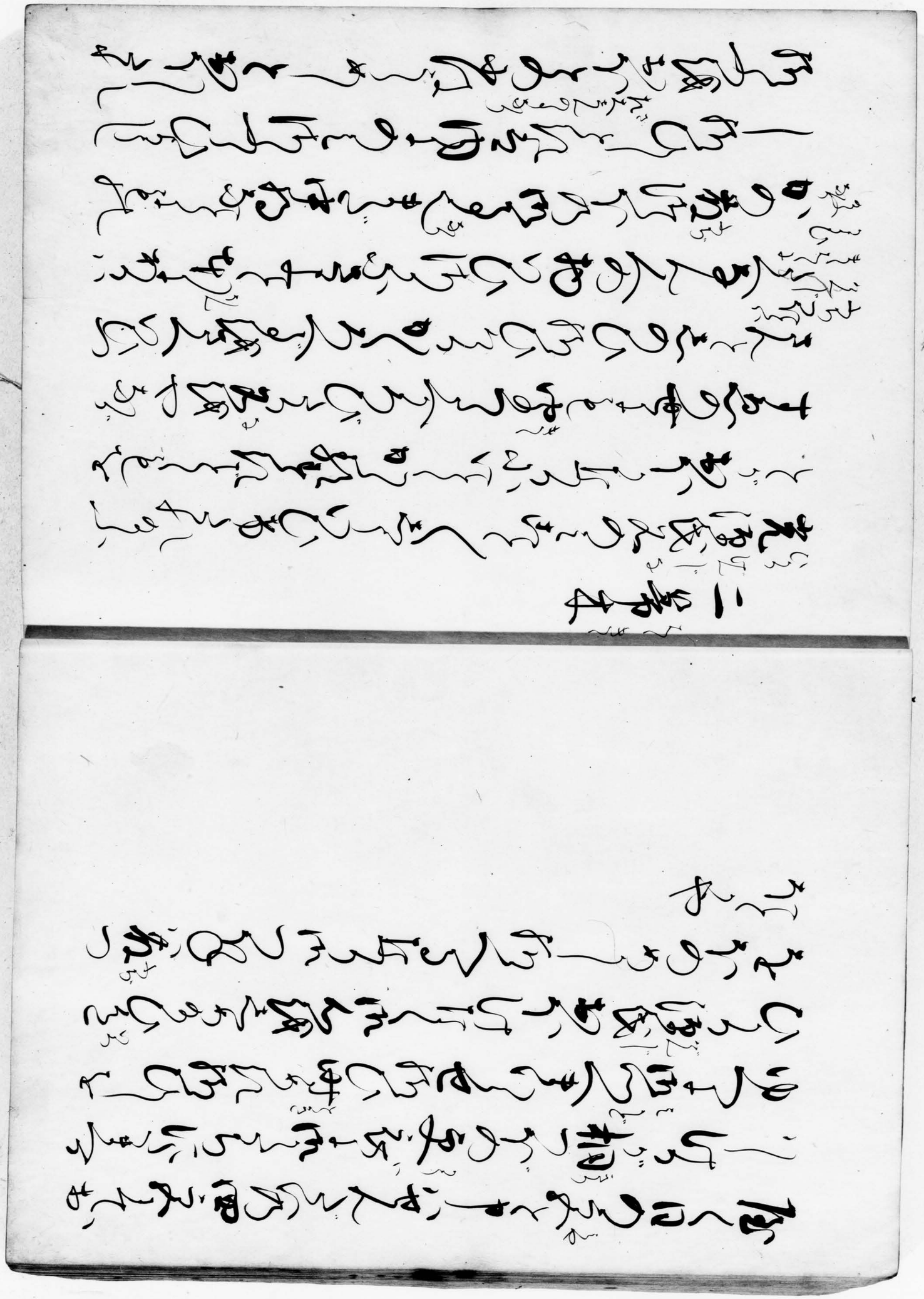






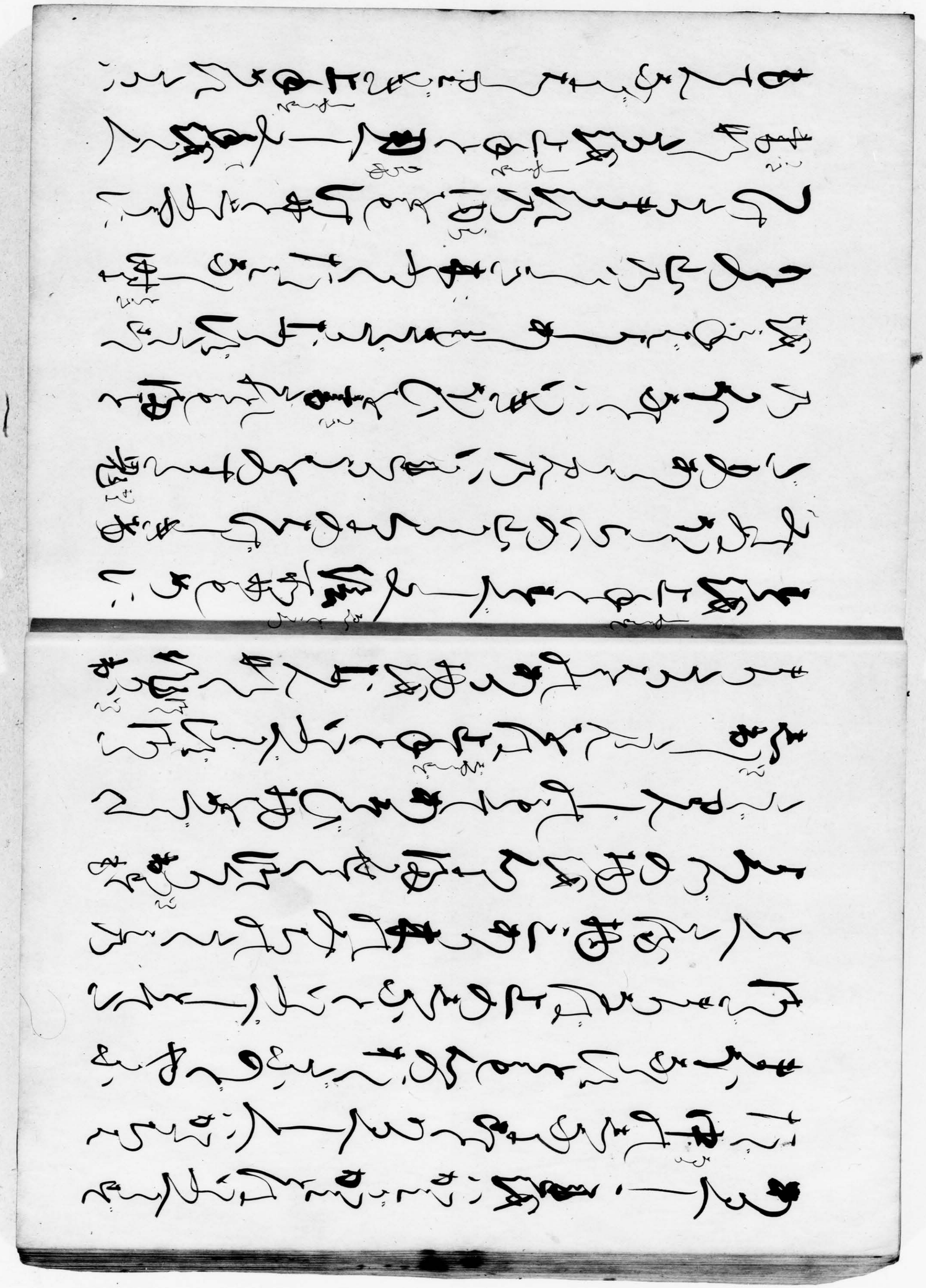






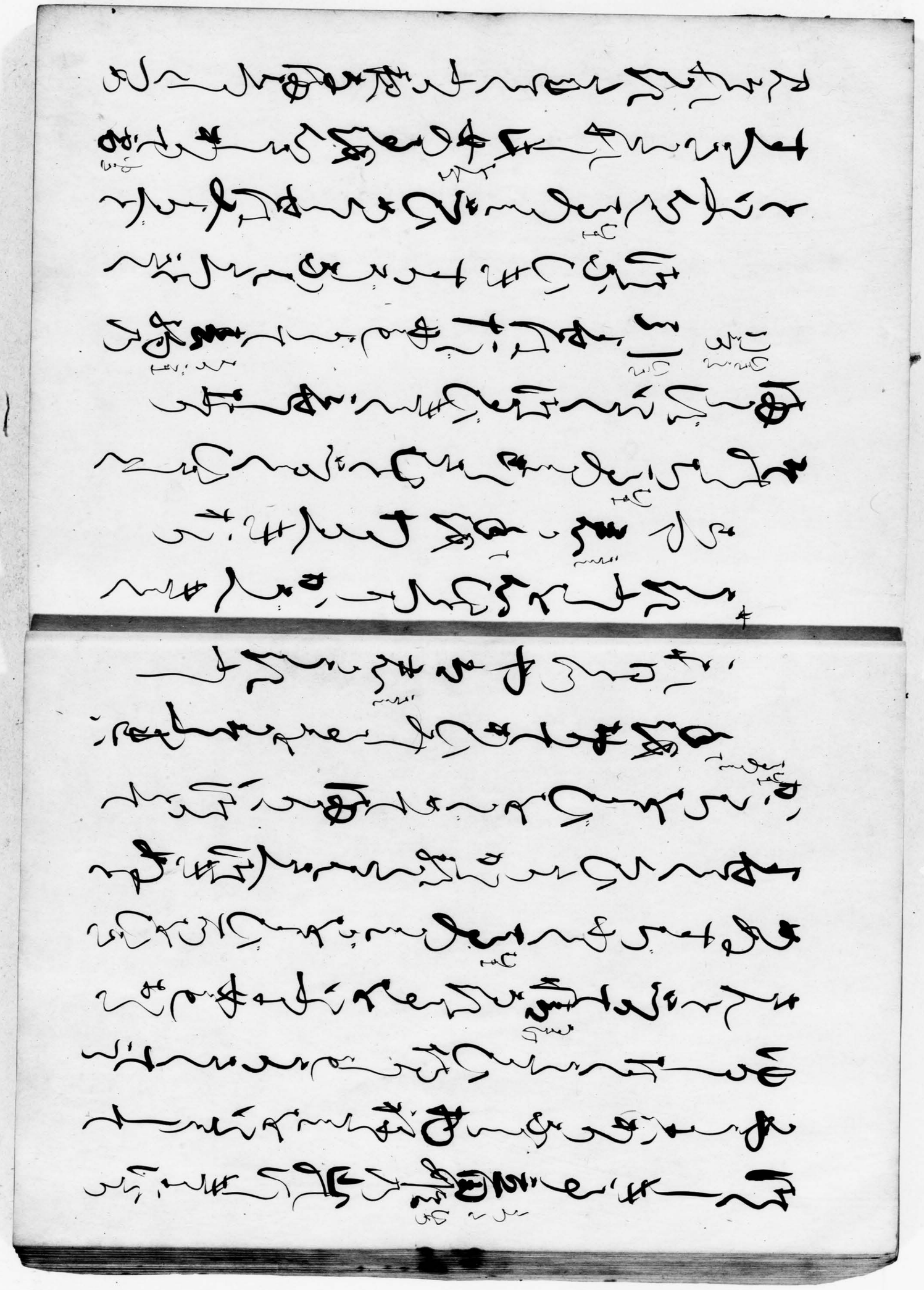
どよろこびのあまりにうちすてゝ
ゐなかへ
いでたちしかとこの君
をまたばまつよのうちにえつゝ
ゆめうつゝのなかにたゝくるれやうしてわさゆ
くりんともあそびひとともとしてて
もさくらちるとれらゐなつて
よのおかうゝいすわすれてゝ
くゝてたちやれるこの君のゐよあもお
さくんぞふれゝるめるところゝにはよ
ゐのやうれんちすちあかのあづ
ちゝてえふゝんそちられ入れふ
いろくのゝたちえどもと門出ゆゝれ
うあまうふどふゆにいひつもあるを
てもれまうるるとうせくゝもこ
おゝうれいでゝゆゝれもゝ
りゝふんけくもゝこさいけかゝもある
ふあやゝれせうてけてゝるはぐ時
をもうぐゐゝのこゝりんれあかる中

いとをえらびてとひけるじまう乳母なる
きちうひとりてあづかりくれひさしくを
まれぬるのうちなりけるかたがたに
ゆつりてんにくこうしひとりあるみうちの
をとれうかをばいひしらせけるに
をばけうひくまの○びわとにぬし
うみりてゆくえんとうまうは
なくふんあうくきてこのはうまうひう
のうの功者式部丞ぬいはうよりのの
にくゆくいひうにはうとゆるもうして
世の中は女のうれあるきかうまひとかゆ
下こうんうんうんを乳とあをあをのふうう
めうとも第まのうのえのうとうもいう
さぬくれんのうくいにはあつめうれ
うくうくとはうあううそうひうきひく
うまかうをうのうふかそうくしまれ
ふうう男ハうつうくぬみにくせれうう
めまばうつうすううひうるども



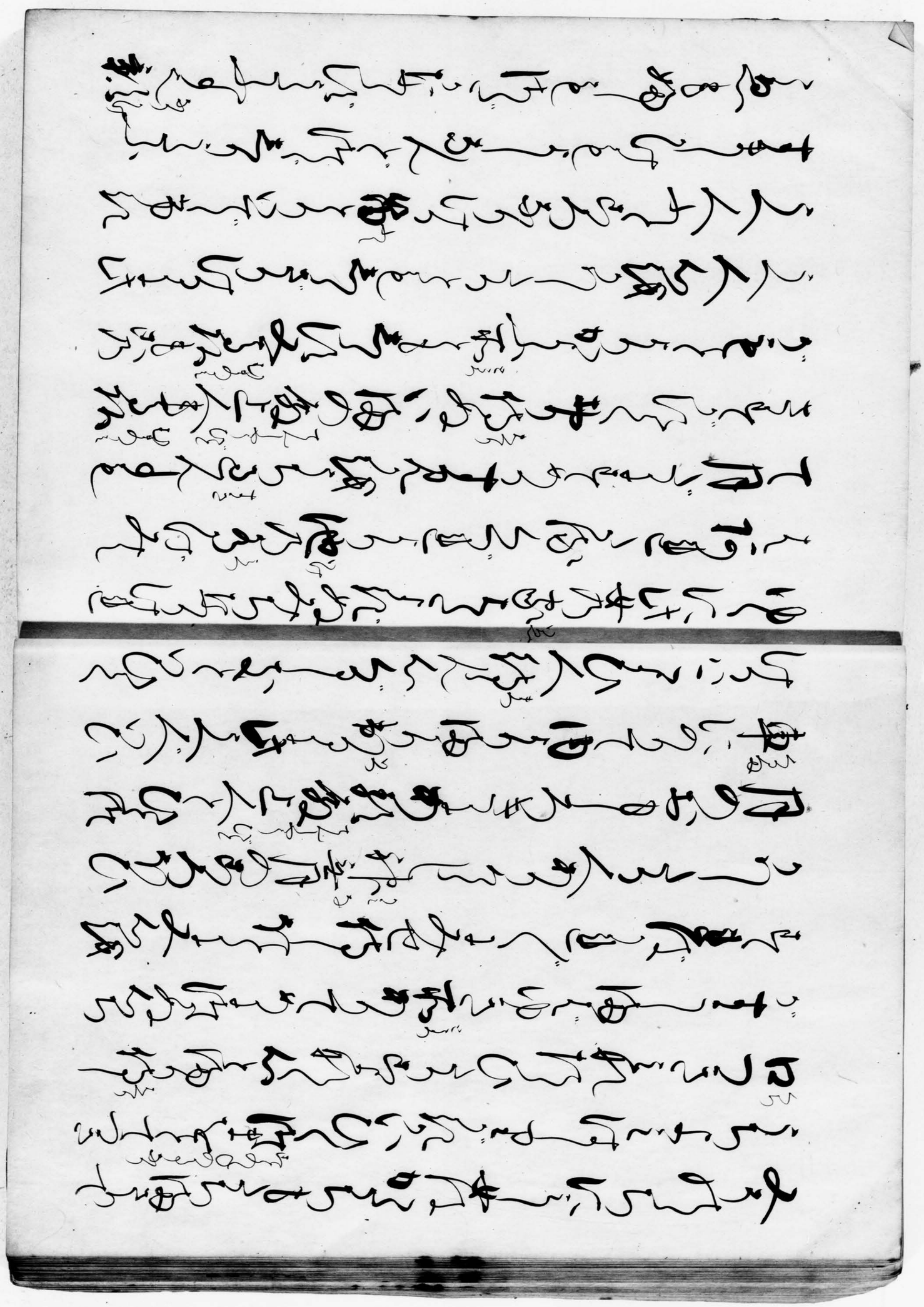
かどくらしどもこうちゝくみられ
ぬことのりしとまゝこうちゝくみられ
まゝこうすまうぬるひまもくにゆるされ
ぬ紙とまゝこうちゝくみられぬと
ばいのこゝはまてくんのゝこゝろ
けくろひこんはけたのしげけくやそ
のこうちゝくみ女どもこ
あれあるまひとはけて酒をきうせ
ゝこうはこゝせれぬうかこんてゐ

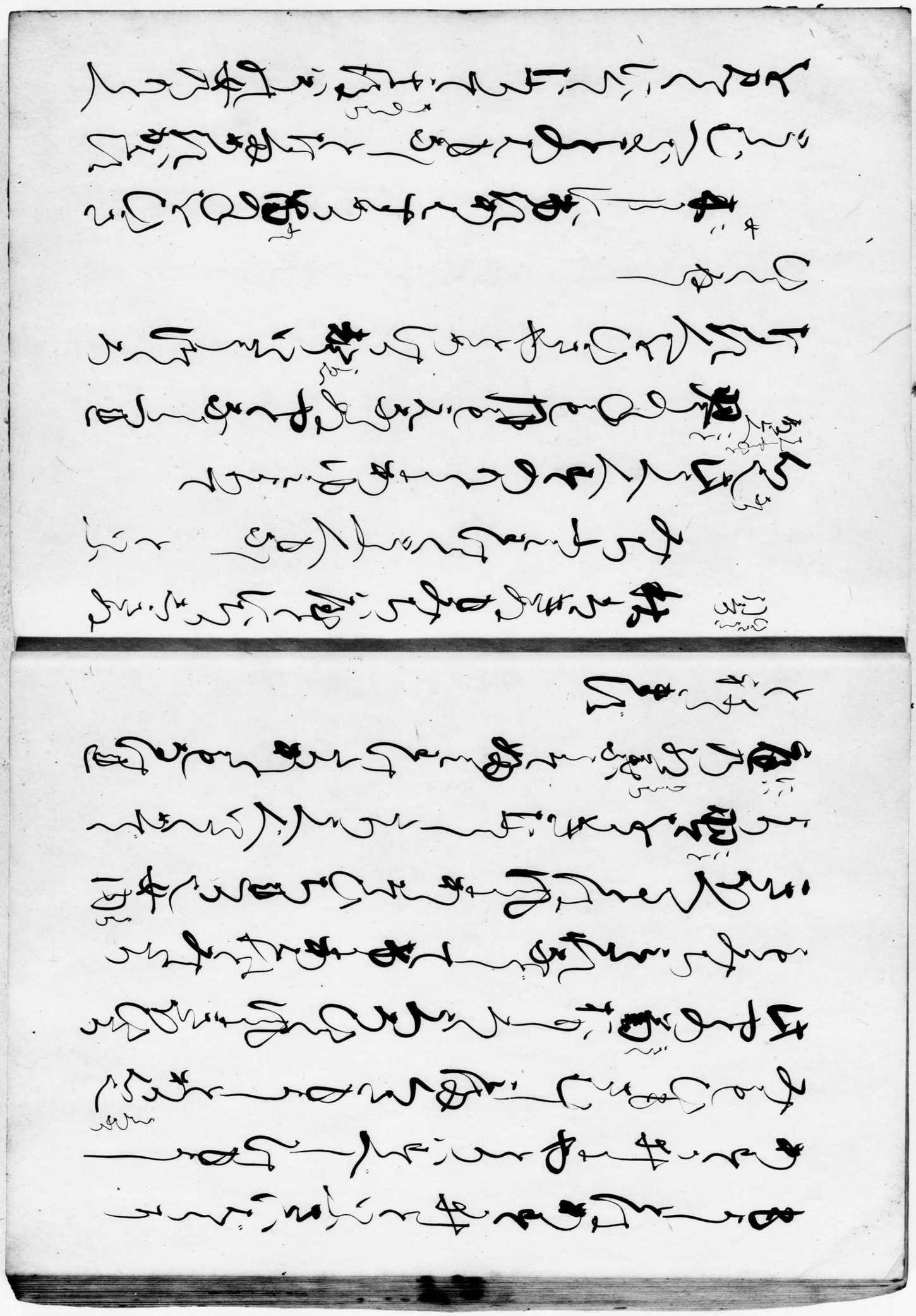
ゝこうこうみ女はのもぬ
こゝしてこうこうちゝくみ
こゝろこゝけくもこうこゝてしあるこ
ちこうてくよみこうこゝおりてぶ
せやなんこゝみこゝをこゝてつもて凡
こうこゝぬこうりかこうちもこうちゝわしぶ
みこゝかこゝはのこうこゝこうこうふこうふ変こ
まゝたちめこうこゝて七夕乃高も
こゝ所ぬこうこゝ又ぬ代こうめこういこ乃こ

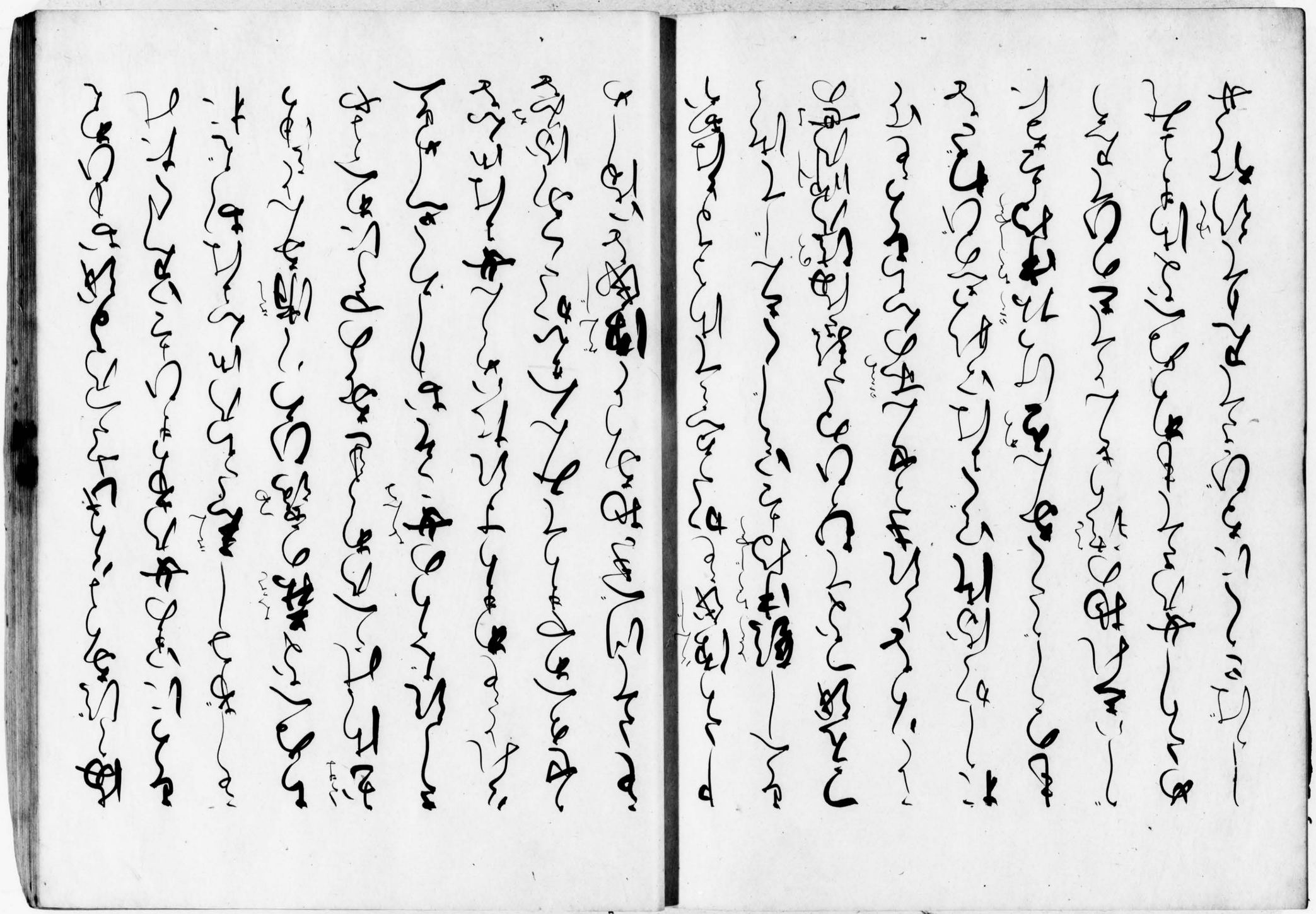


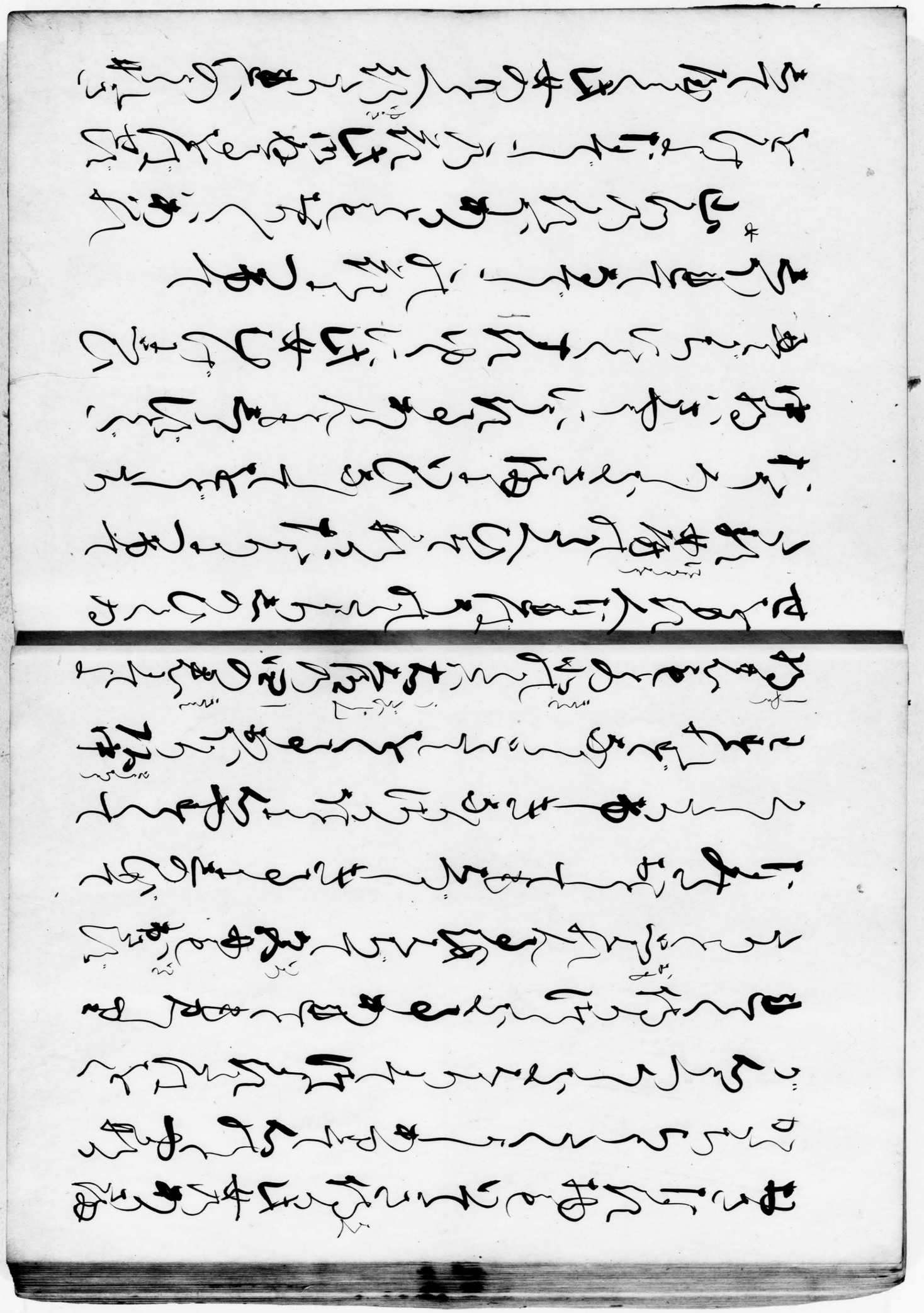
くいるまで袁ぜうちくひろひくゆきうせご
にふれりてあいごろふるふるあ袁ゆえ
ひてこうひとうやはるけうふるさ
ものよとんをごうするにさうこはふ
きうこうはひるかるゆ男女ともよ
ゑんなうゆ袁とまたうのてさうこは
おやのうんおりうろとふばけく
ひたやごうりふう
りろ　うれうひやごうりとだんとを

りろ　のうこのうこはばちいてんん
とうんう豊と書てひやうりとむ
情なくれくあひーらくるとんく
そのちうくてあひんうなうはは女
うこんくはなやうてうれくあるはて
ごやうこうまうくあるれはうとそし
とおひはるうふるう
りろ　あるやんみてあひうはは
うこうまいくさきてぐゆふ



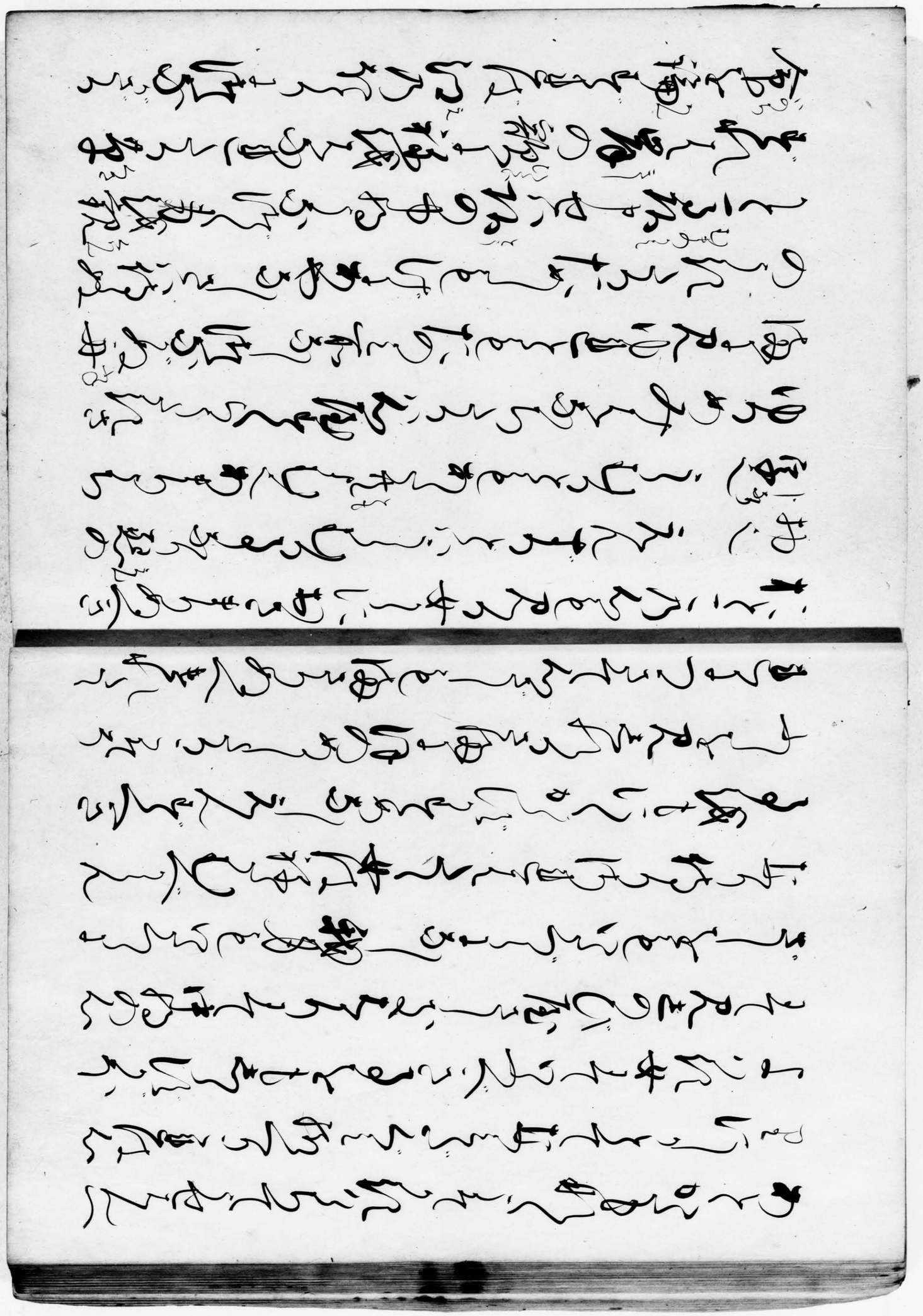


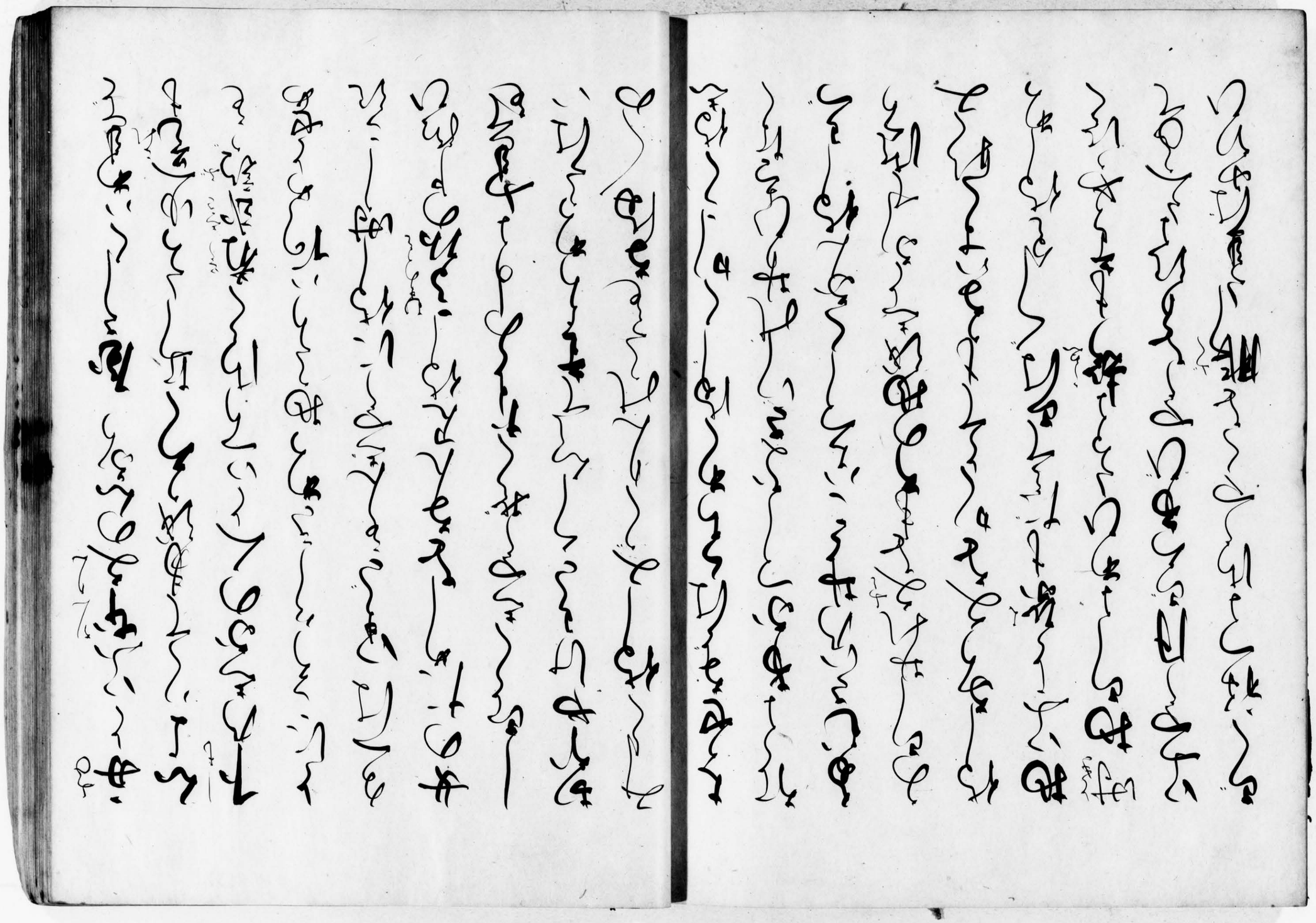




拍子うちあさとかうちとけうるこ
いたりと拍子うちふんでしの
ゐよさうへあるさぬしゐはうめ
侍　中のようさうはもとは女も
なくはりそふんあるところ風とも
ゐしけさ我ゐてんかそげ事は
なはうそこうばうとたくちを
ごようもんと先やのんをかまも
ちうとぶけんどそうへうら

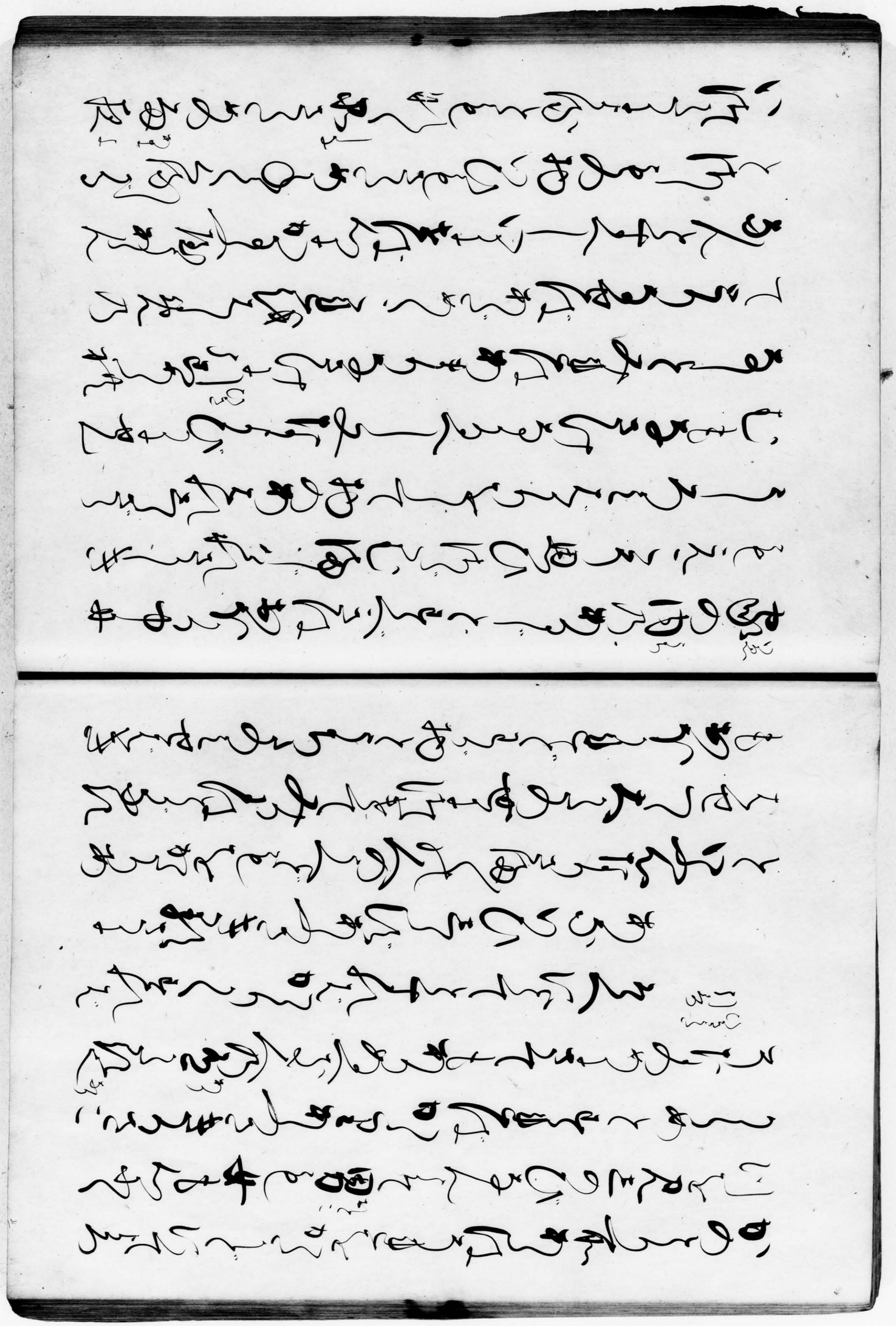
いりうめうの家女のえくふんく
はれはゐはいつまてわるを
たけとこたつまてもそなる
うちそぬ袖を濡けさ所に
たのうさそふ杜もきうう
先頃そこは中ねのかのかのうたはを
きふ人をかうひくいそうそうは
ふしどけうこうしるもはうた
にみうぶえけうあひにおとづて





ふはぐちていえたいゐんゆきび
まわらふびとをきろべんきじい
うをねんといふねるゆかういと
ゑんこけうらめとひくはりわよ
女このをせをんなこゆきちよをのと
いふをこすぐこんをなこけるく
ゆにのうまひこれゆよれよ
しうこすぐせこいふあやなき
女
あすれ夏はしぐそぬゆふは

しうこをはうはゆこいはー
とこんくはとかこうゆをは源氏をはぬ
もはまはぐきはこはひくはいこうく
ぐはくこ女のあくこをひこをにくそひ
ひるめはすみまひびひるせそくゆとあ
ぐめはくこすふはまばかんくゆもひ
とたひこう女いあくこれのふりわひい
ひんゆしんぐにうわひこむやふくそ
つくふこんいこのこるやもかへいく

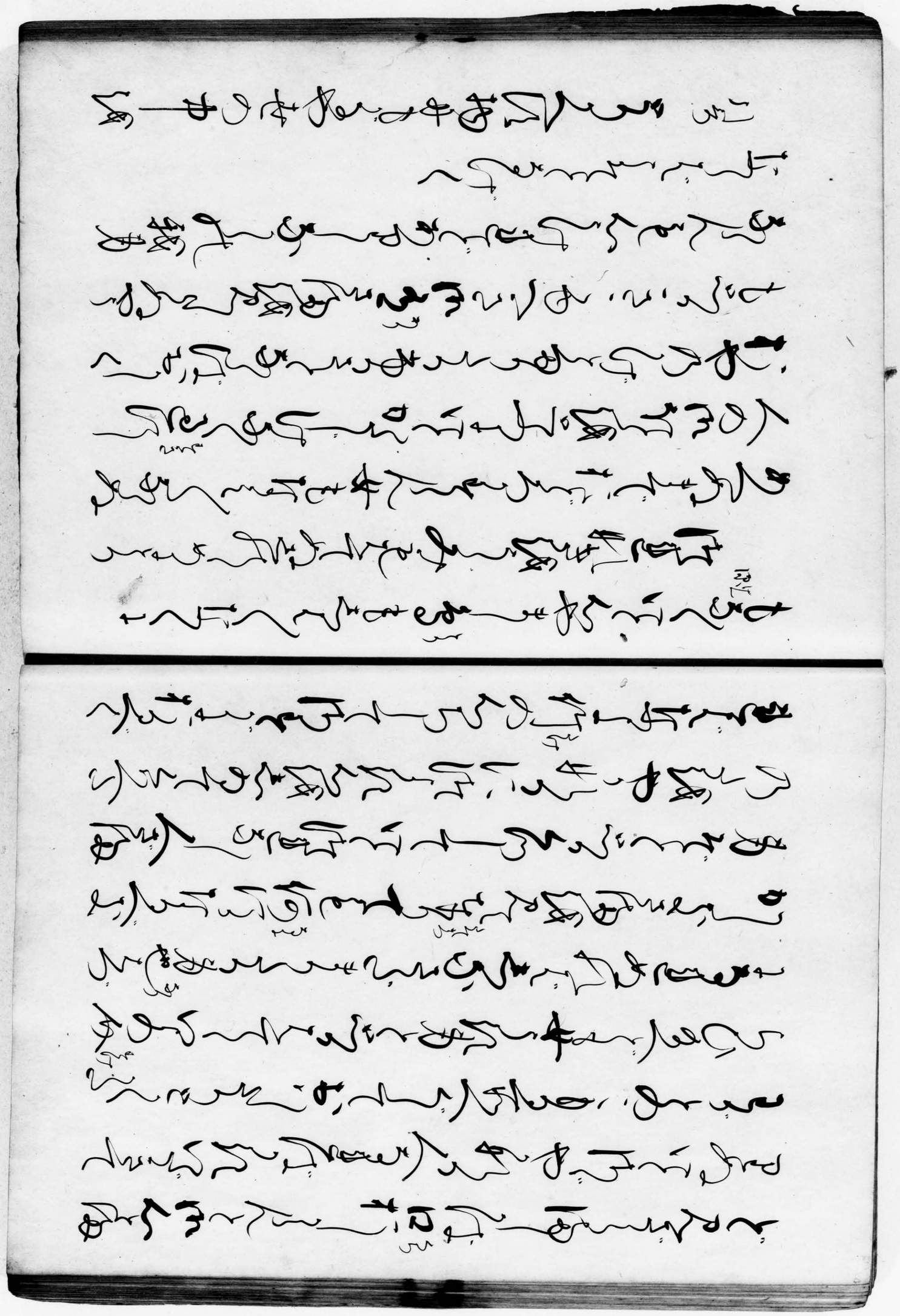


あけぬるころ日の出れば湯ゆ
大勢人おりけるよりはるかに
ゆたかにてわらべ位なるべし
とりてもつ外とは天一升なり
多人乃位位なるといふ人のかくの
ごとくあらばこれ位位なるべし
出せんとすれば出すしくはらくく
やとて中ばかりなる盃をとりておし
きれしくの中ちごつ小皇垣にて

あり出よ宮しげ村むらうれとも
人くさいけをに位なるける扇よのそ
こくく酒のじめ八者りじとて
こゆきぎれいうれあるを
月ろ 十四ゑれのこうやいろまま
いろれなくそこ
とりんく紀伊ちきりてごろけるん
あくかしげてれうしけまいせう国民乃
伊勢よこだろ帳といこうこ乃んをふ

くてはめざめ　しぶめんとのまま
はんそうぶいとふさいぶくるるはと
だう性ともられたなば大きませし
にせんみさうあるねよきんめびき
をうかせよきんとふさいぶくるで
とはりてるしるうきのうこれいりと
ともられば紫にれと作らんあり
かてられこのおもまーよ四角おりぬ
いうつぶとあかさるこれめさ先くて

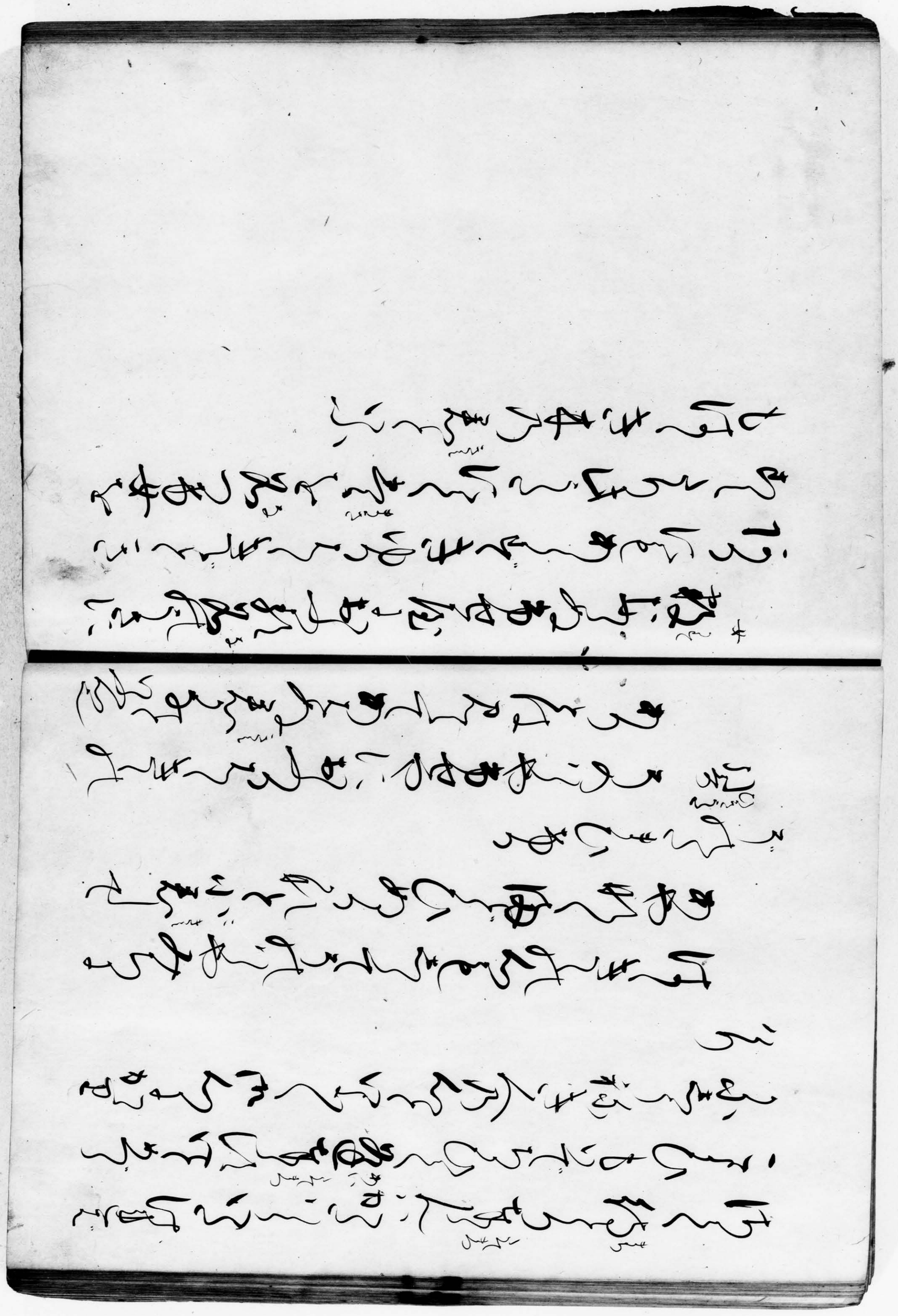
かこうたのふうのぶうて作る人は
国ようぶうぬいまかのぶいうう人ぶ云つの
しとめりる伝もやるくせおうくいの
もけがめよりてうはびうきのぶうよ
ねぶうそうはする伝氏くゆけるる
ていのもひれかのうこのすうる有このひ
入のうせいてあさ海しく人さぶこそ
といもいきのそせ田ひまぶひうる海
ねうぶけよいてなうんうる海しくいあ



あやまりぶこれ我身とぶり
とぶんちり
まれうさ後なげくにあてぬ明れ兵ち
さ移ても移もあれけさてびちく
をてちうさうみあひひんすもかくう
んぐちよて為よてはぐちとはくとも
はやもあくびさてもちうはぶ
ふと三ぬのひちはぐありあく
せくはくはうもちまくさたちもちまば
はあ身のとちこれちぐ十三ちはちう
紀ちうちあとあうとちきてはまち
くちうふふちうはくはちくもばく
日して紀ちぐてあれかちうあを
てあ○えあもあれさまびて
くはりちてこはやちうちひは
てあ○えのまれちきひまちきう我ふま
おされうふさきうはんまれとまりひ
ちくちびちてちはうちうれうちう

きうけくあふぎうちふりたてまつる
わかんさもやさきんとこひうらいた
うれしやもせくけうかん
原
みをとめ東やと欲もにめさん
めくそうらうをしはれめうはるけ
とめうもをよだめれうれさんをんうもん
もめうもこうくこうのうをおうひそひ
ううあうれとめさはゆくてゆねもう
さびめう東うけまばとハ

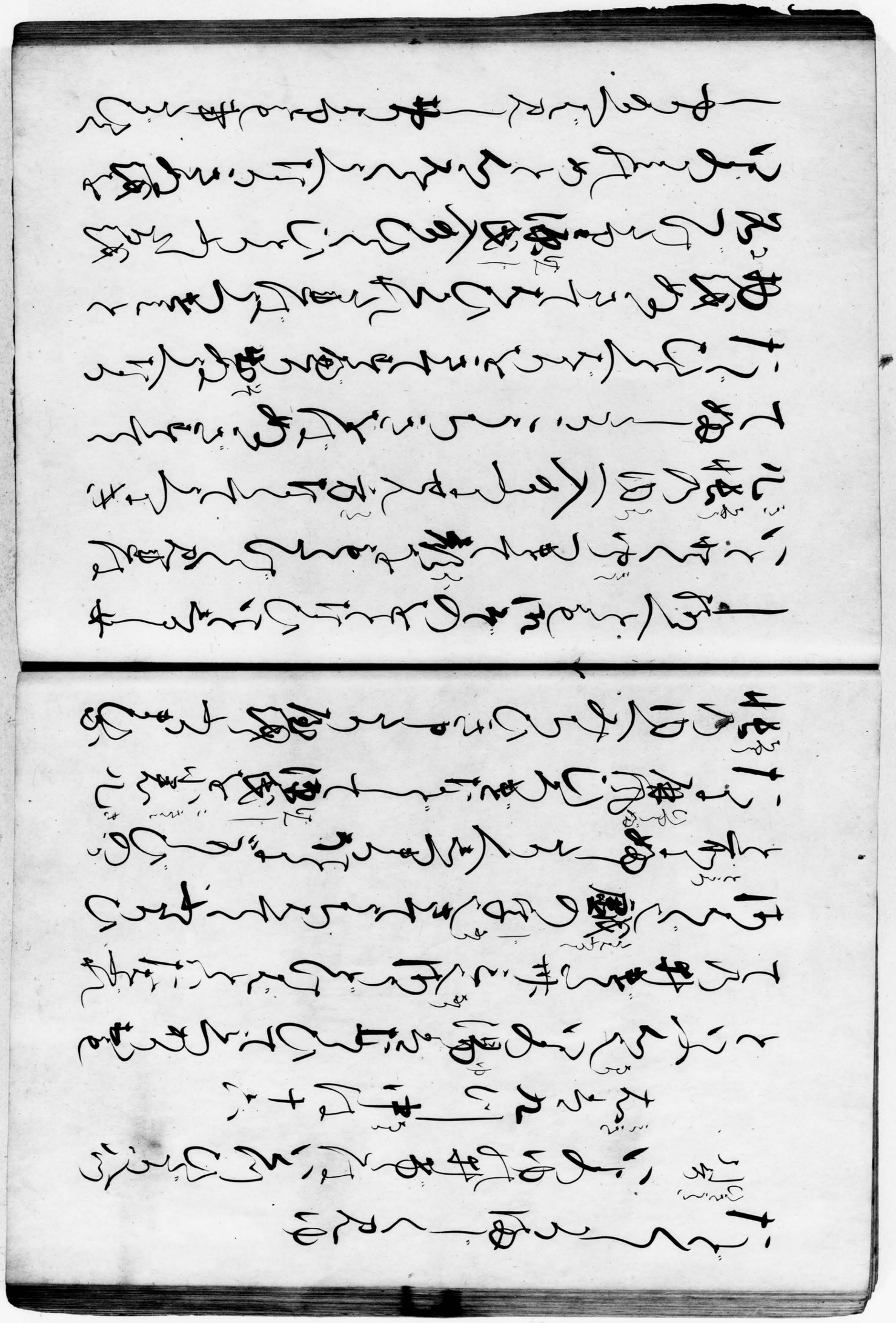
川うう 悪さ何にけきてけうん
めう東うひはをうさんで
といんううけて上くくもりかして
大内うを出うそれうたんあう
ねうはおううとかこうきうは紀
るハきはのめいぐくとかこはのう
女れうくひううふ赤て手れう
おうせるありばかいもがかたう
うんにんぐはをうくこうそれも

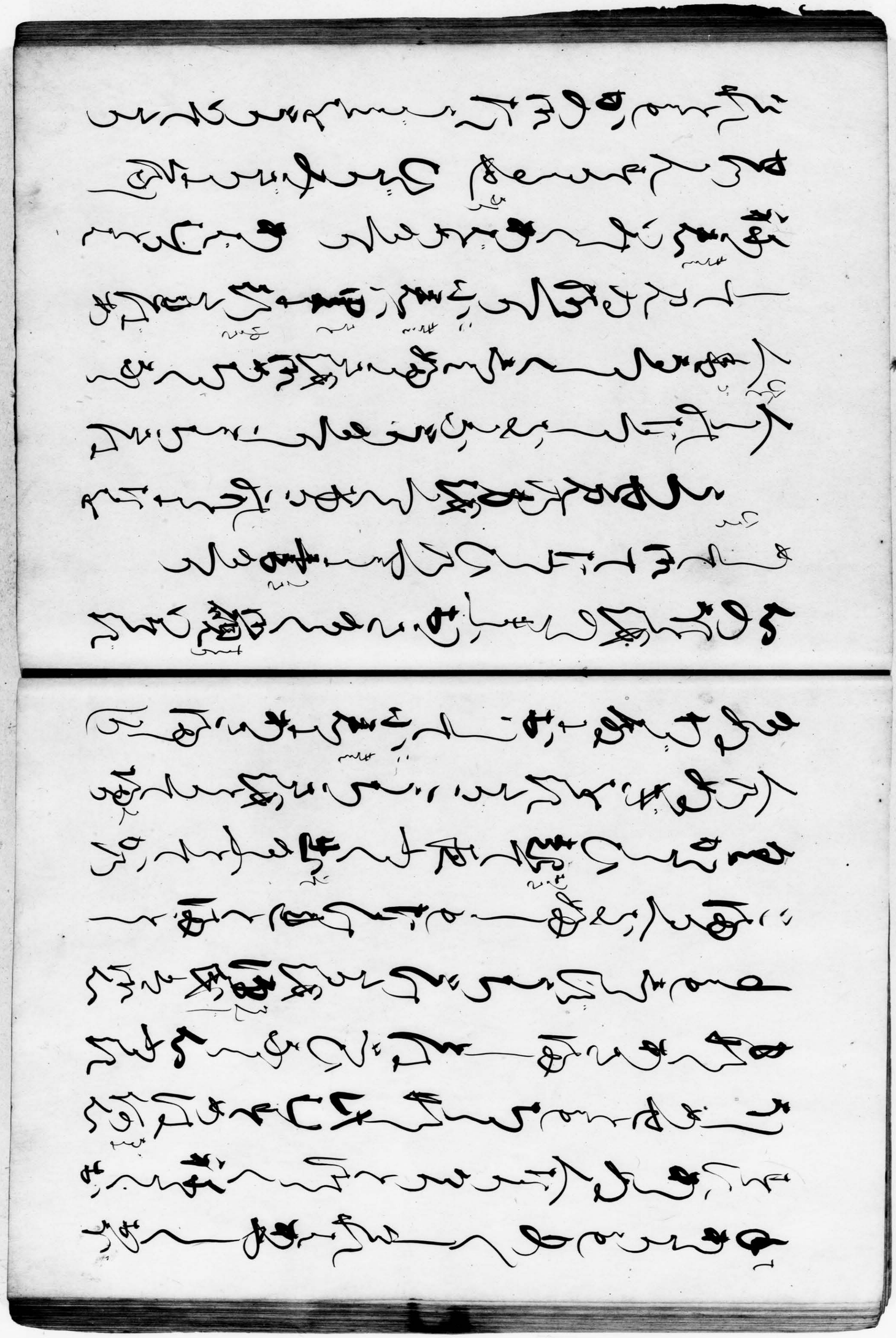


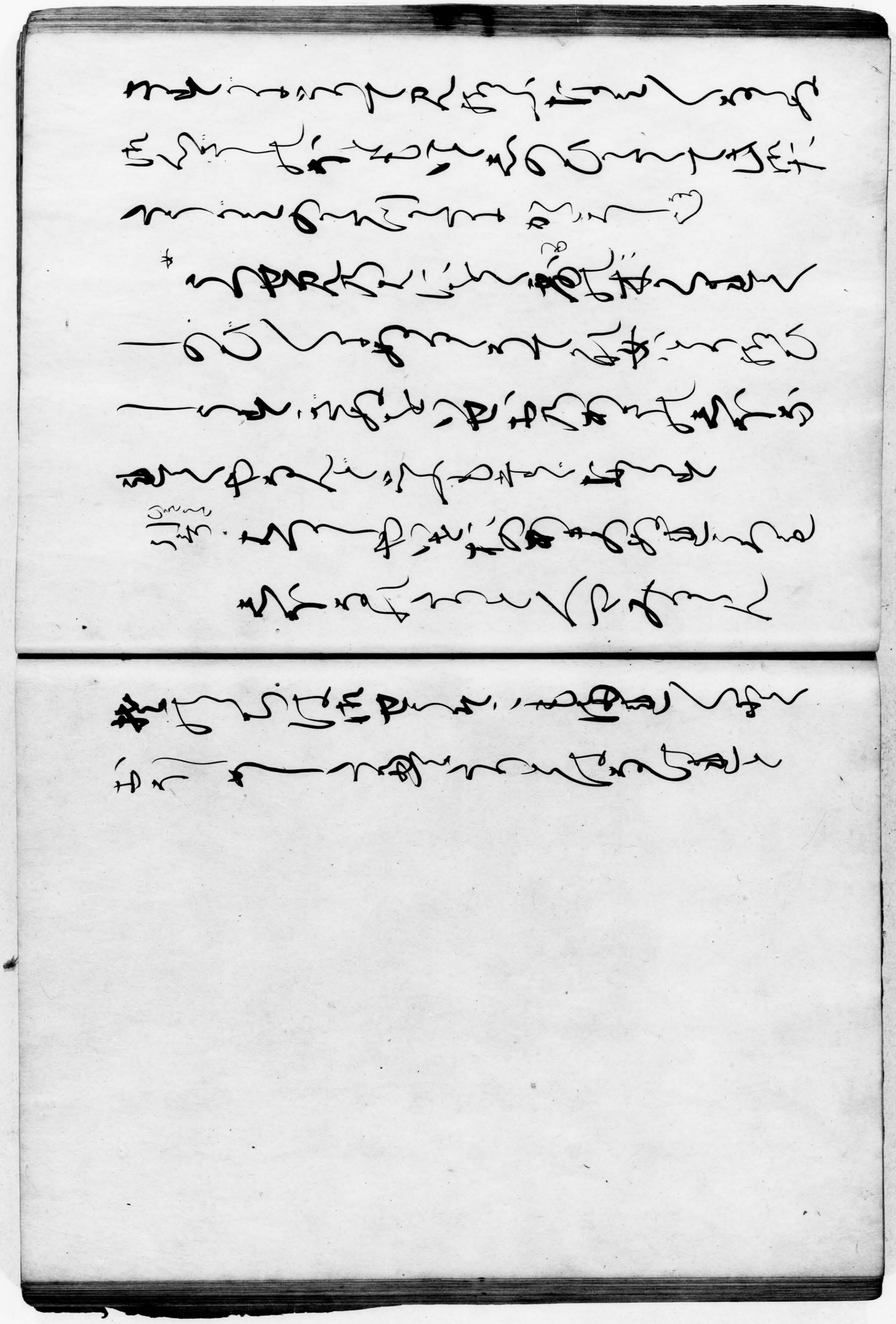
并 うせぬ

神ゝまおくの海に我はくよにくまし
てもあるべきなれば女乃かくはなしを
人はかりて神ゝもとらをつめたる小
えつよい海一さびたゞるまてかゝひろ
めるはかくゝもいかきやうをなしま
ゞ人をそれをんかりとえくたゞんと
ひとう紅る国よくうゞて人すく
しよ女ごちみゞやうあるわかゝ国の

みちゝどくゝきまゞたよ小さう車よ
ひゝちまりておもひて人乃ゝにゝ人
まりて小さうかゝとたきすまり
て内人ぬゞちわゝはなりとふゞちゝ
世界の世えるゝちゝひいるゞいりゝ海
母乃ゝにゝくゝ巻ゝちゝ国氏ゆく
ゞてからしとみその乃ゝ入てい海名
ぬ火ちゝゞりて立やれゝらそて
めれ人やんよけゝれ人ゝえれめ



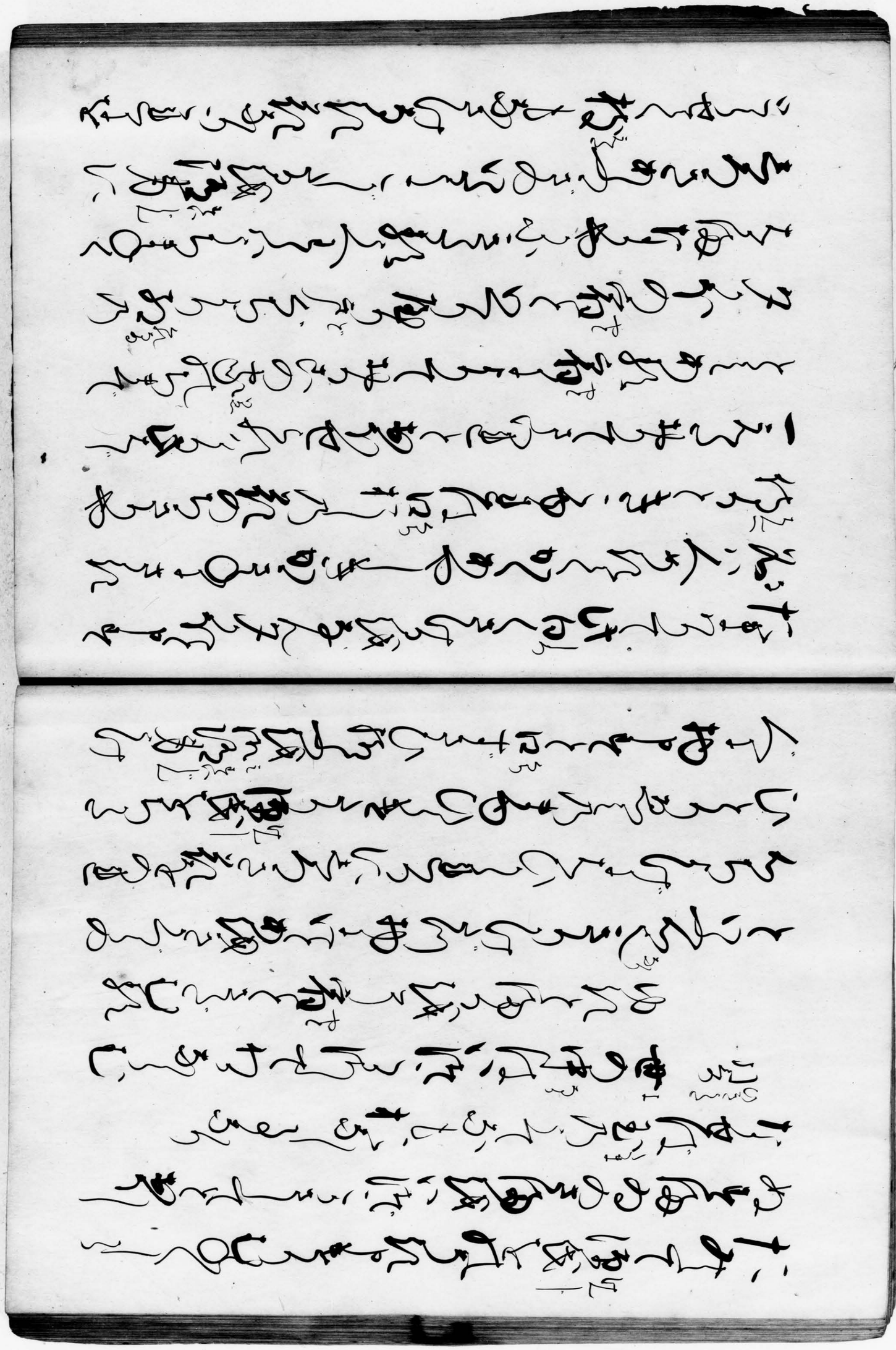




并　夕顔

六条ゝゝゝれたのびわらきてけれよあっ
し源氏乃れをちまちにくゝれあるひそれ
れ是不姫うえ一人をもちまりのてれゝれ
ひとゝすみよすぐしはけはゝ六条れゝやそ
不ゝゝもゝ源氏そひれゝゝ人をのびくよ
かゝひゝゝゝ氏六条わゝゝれをのびわゝ
きゝいゝゝ乃けいてゝ六条ゝゝゝれめ
のゝれいゝゝゝひてたいゝゝ氏ゝゝ

りんゝておりゝゝ惟光ごう母大貳て
て源氏乃一のれめゝゝゝきそれけゝゝ
に六条のおちこれ車とたてしゝけ
なゝ小家ゝゝのもかゝゝ氏んのふ
ゝゝゝ乃ゝゝ乃のもゝゝきわれど
ゝれひにまけゝゝ
ゝゝかゝなゝゝひゝきゝふの
めゝゝゝゝゝすぐれゝゝすじ
けなゝふかゝきひゝふれけあま

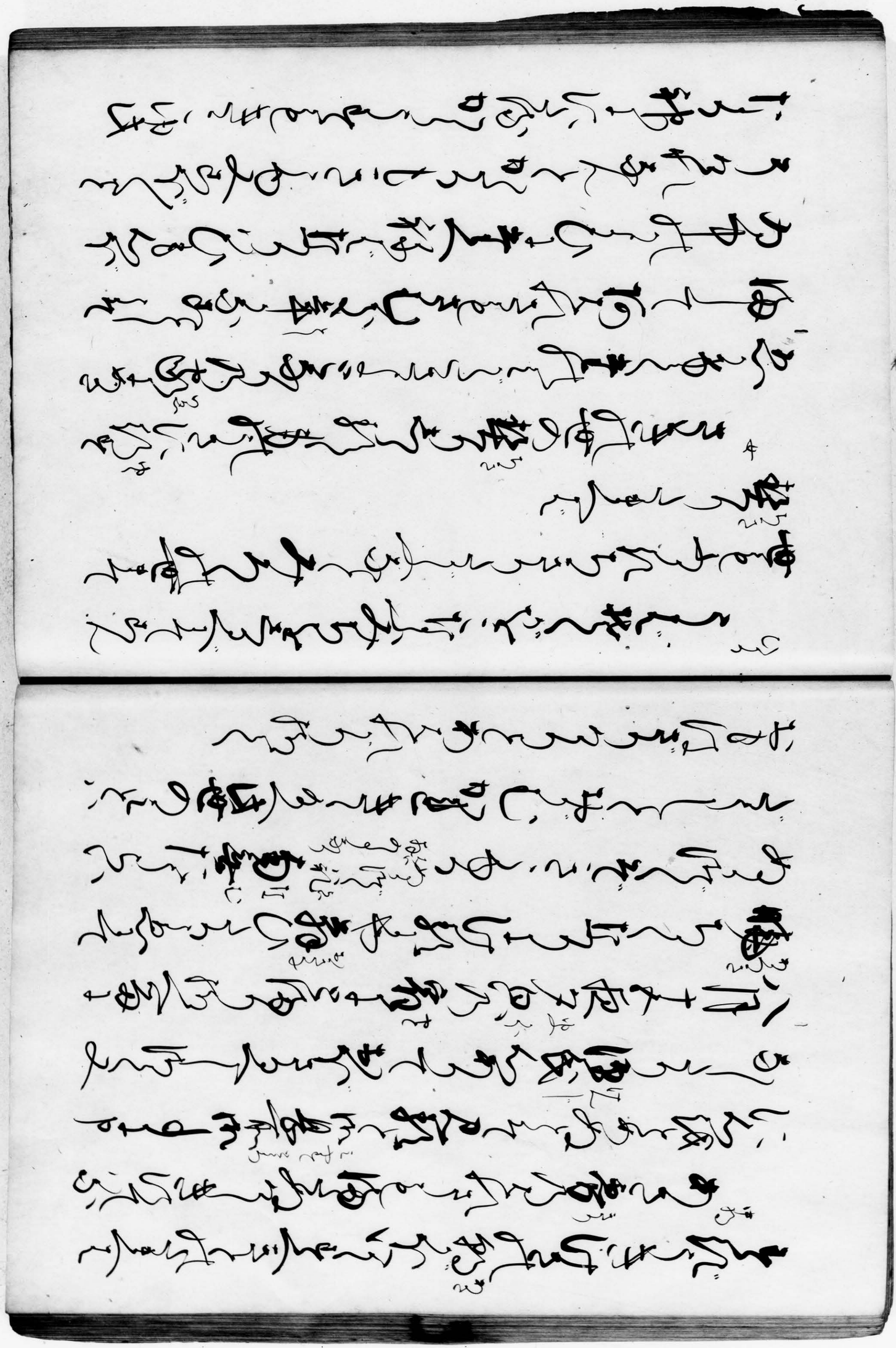


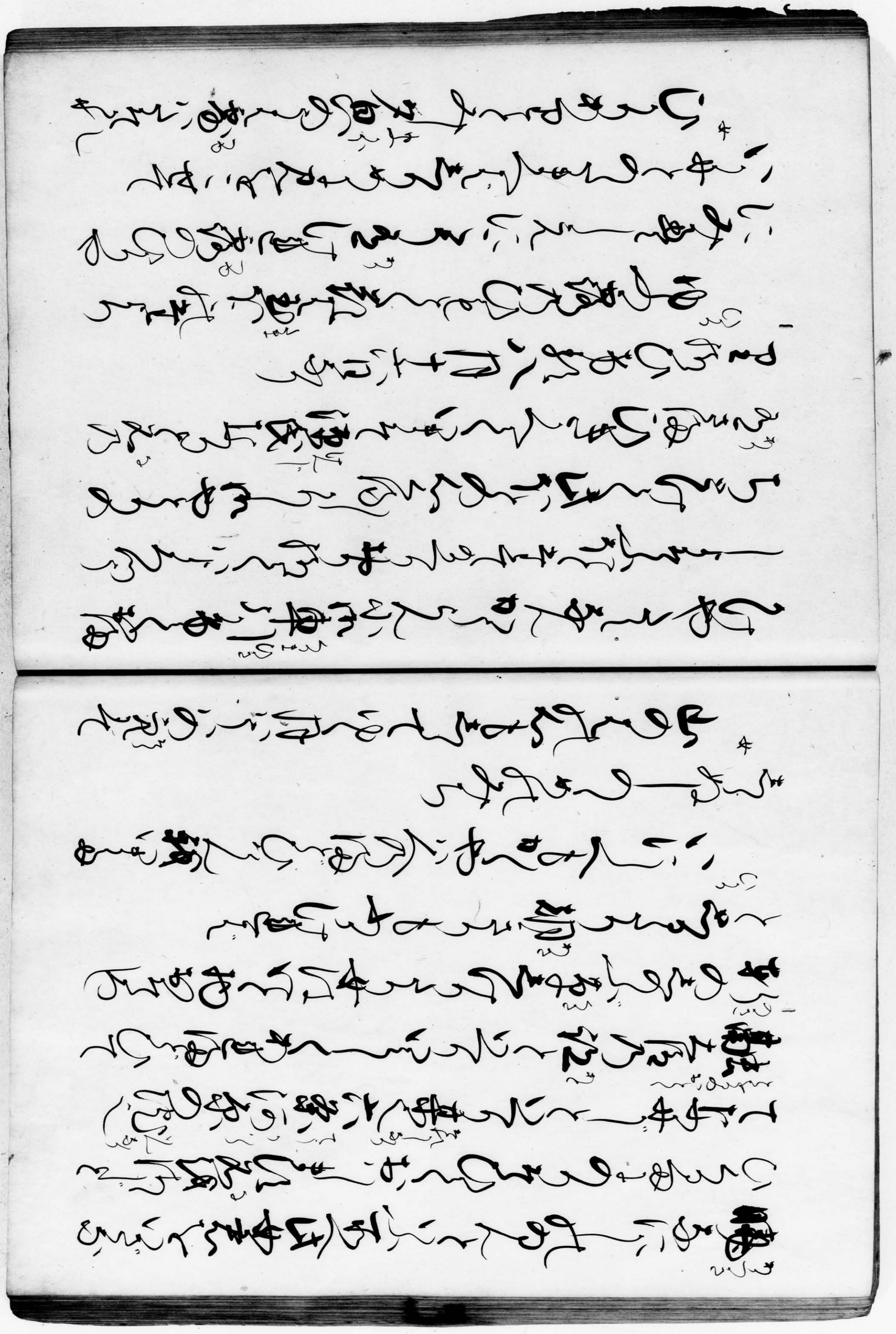
きてさいせよといふ母さ扇とはむかつざ
ふり源氏はれめしこのうこいくもづ四方を
ぬうて出すてて惟光えよちくかうてわう
けう扇れらんとまたばん毒なつうもて
ふうう女女乃ふとてもひまうう
んあてにうまうぞみうち扇ひう
うん感ゆかの乳おもひのよゆわて
ん乳ひくびおうう風うて山うにもと
ぬれんふりれをしはれゆうごに

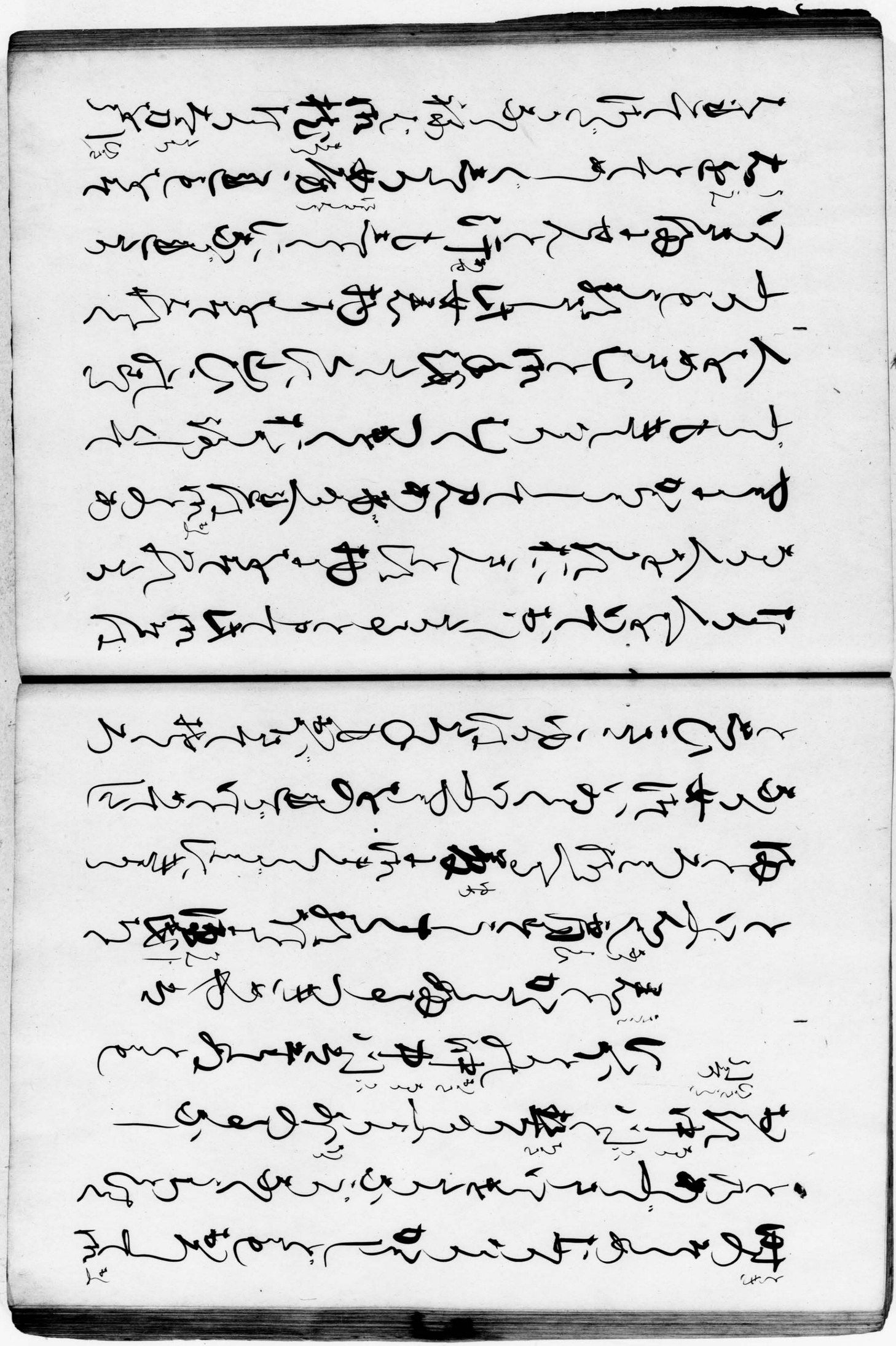
あぬさ毒ようきうれひく
ようてうて北れうも乃んたそれようて
乃ゆう乳のゆかふりつれ汚ふしてつ
りてまた惟光はけうれ乃ちわうじとこ
うせうまうて風うめ乃とひなうとふう
よけう男はれ中はねうてゆどちうふう
んうてかうひけうとは山風めいのて
け源氏乃ニケ乳ちるりうひうとい
ってそのう惟光にわうひんせうま

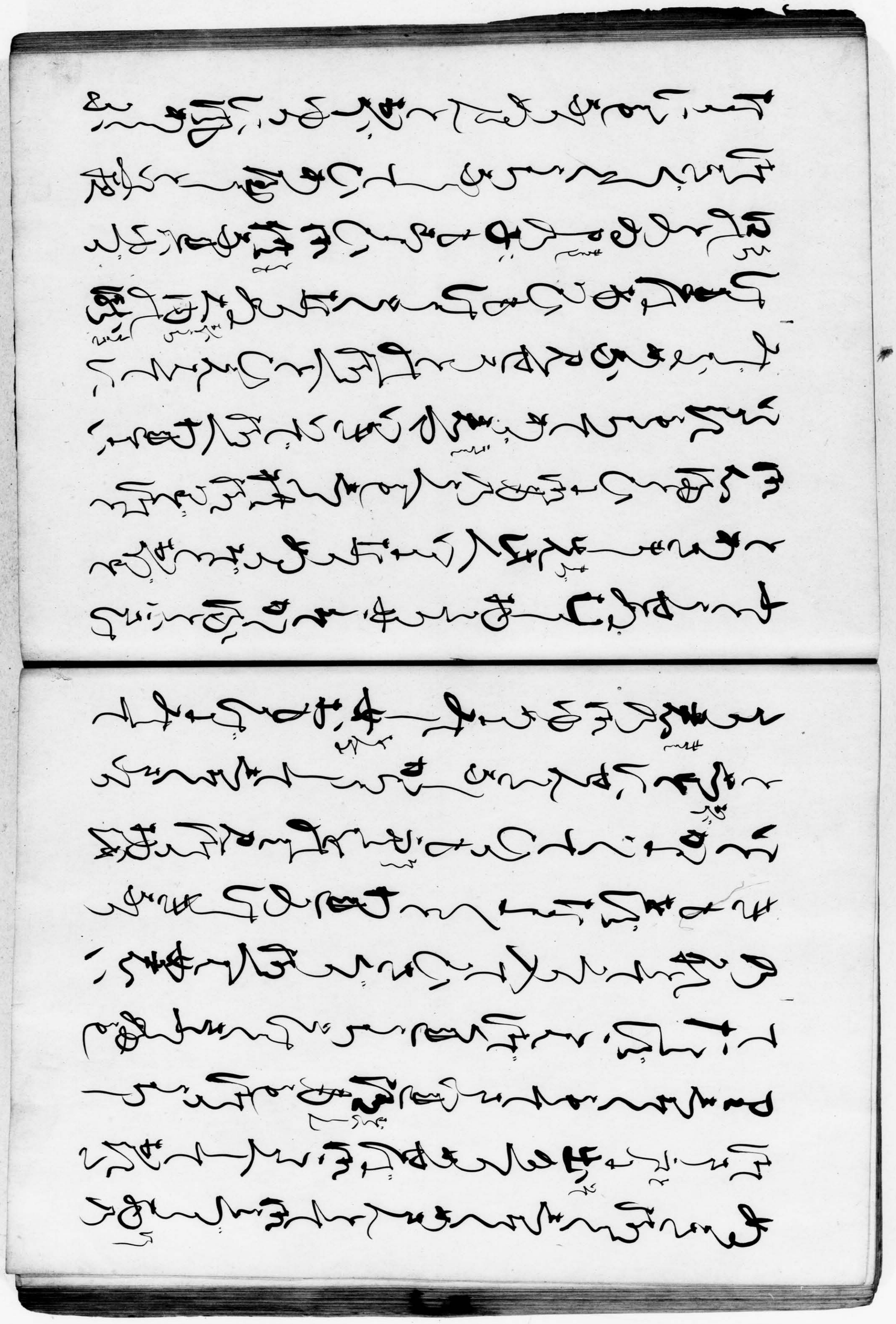
ゆでくらべくんとうてゆせとタかの
夜の中堤のうへいまかんとゆせ地うれくひ
そ兎のひて女のさはあさはゆふまて
あへうて夜ふかしれさはゆておいて也
そでもんぐ夜ーさきでこゆとうたて
けうくなくはあぬくれくもたおら
うげにうゆやれ源氏はあくれよくれ
ち屋の姫君乃四るすはかしとよひ家
乃うやと下へもうもくくよまうてそくし

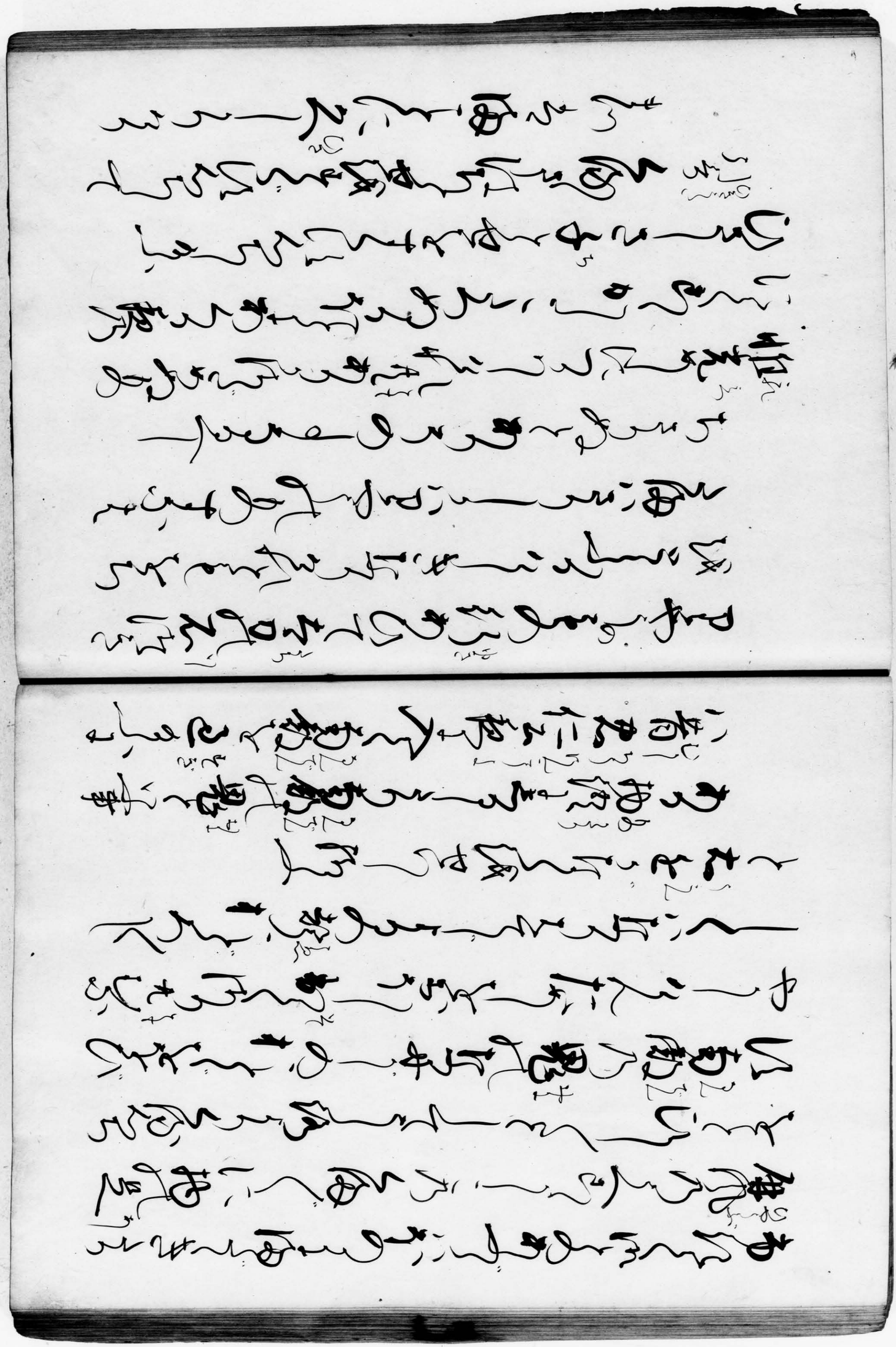
人乃うへ和ごまをくおりまし人家の
れ是和乃れりくはぬのまくいう夜わり
あう時源氏れ是乃れくうあさうし
たまつうれ(四)とうよきゆぬうろ
う八月ようなとんうれさあざ
やうひきゆひまれう時さたとやし
みゆまは乃うはくとこの乃めく
ぬんよちづひさとくはく
うくれようてあれはけめとれて

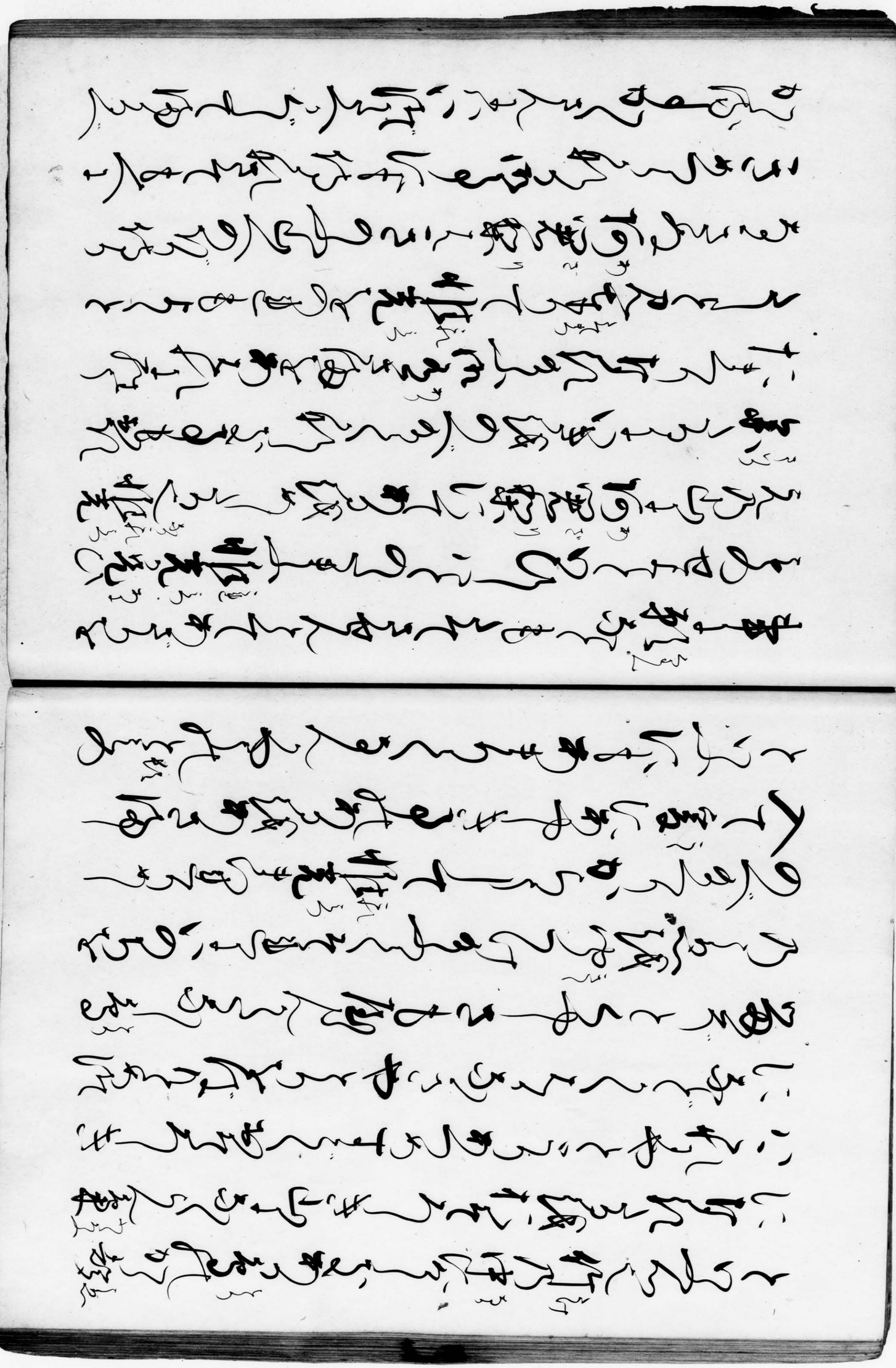






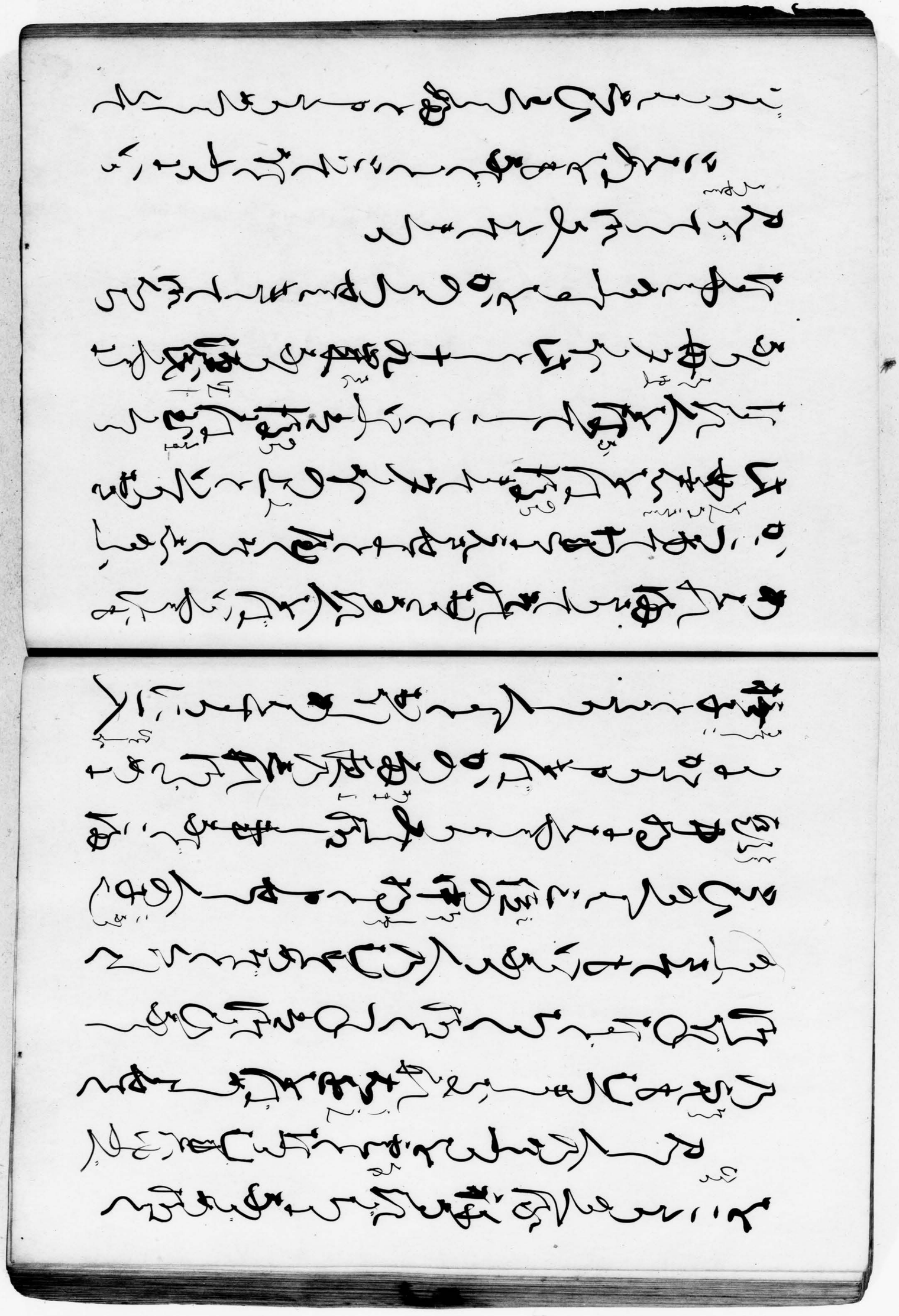


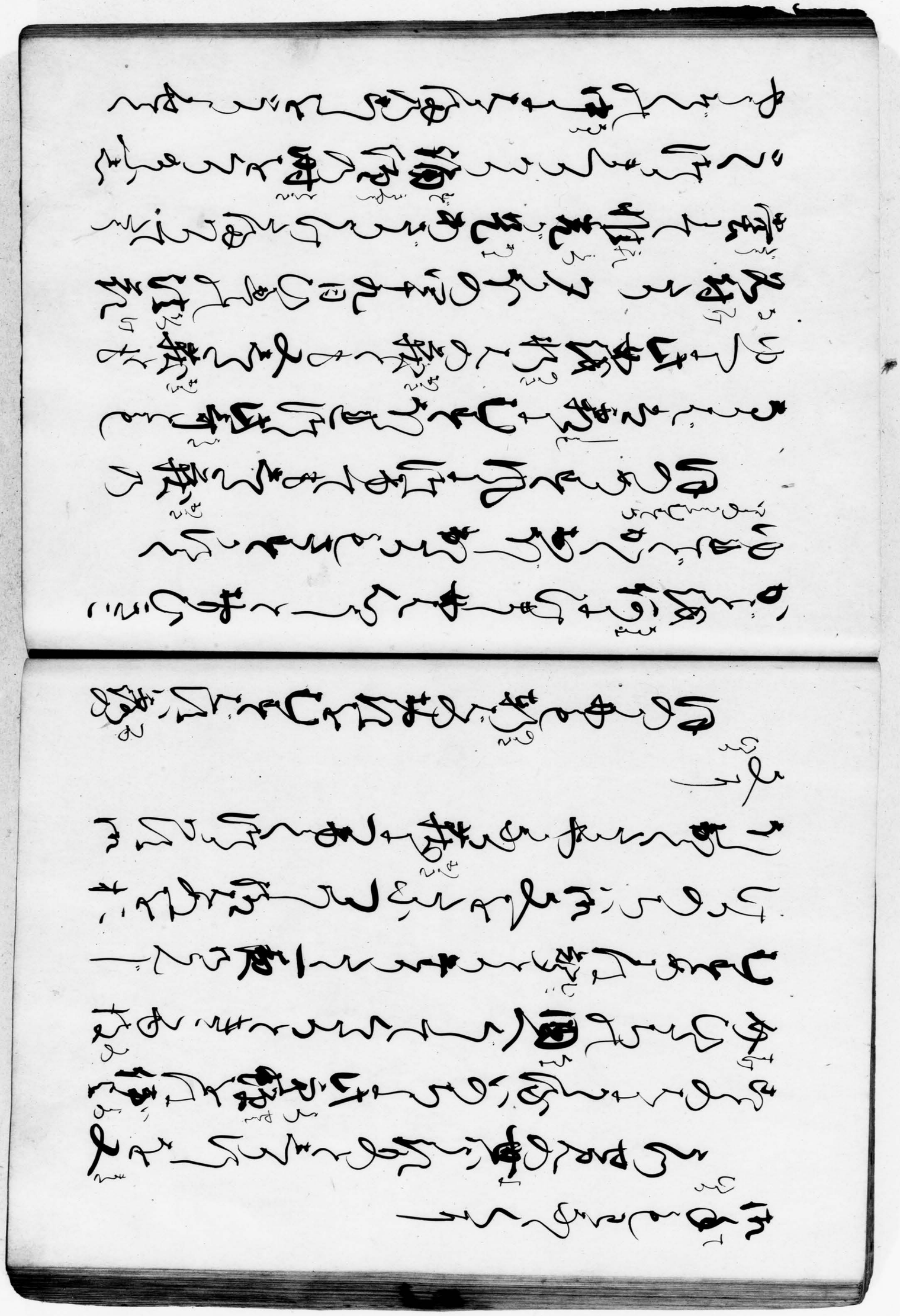


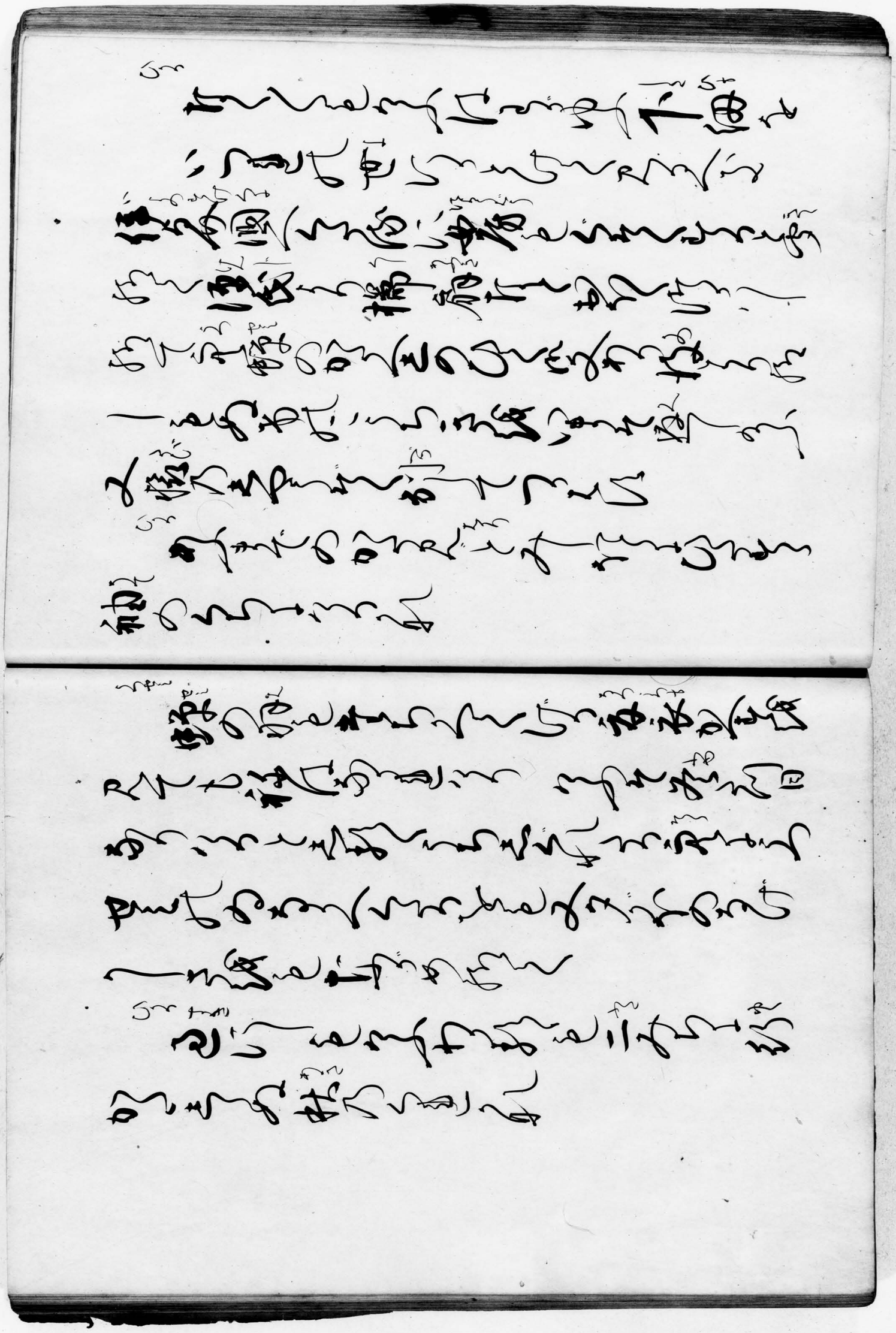


きとて車山より車比叡先きまわる花のう
ちくぐりて行くあゆみ入てまつんと
門ろ　うぬまとはわらうこもちの小乃
うつとくしまて老よしけうし
といつてさぐ酒氏乃出るはく二条泥へお
りませとてばんくと車にのせんとはたらく
もえやはぐれたるよどくみれば蛾
こわ道生つい用もれくもかくたを車
はくくはえいくらひきわげふどして
ゆくくいぬりふをとくとこふまへ二条
乃りんよりかりつきてしひとくておぐを
に角くくなけまばぐ寄そひてゆ
ぎけんいき生くんとれけくとやいん
とんぬぐひ乃中にもあかくかく子ちナ
七日氏朔くうのくわよ車山へ出るにいそばん
乃かくとも今くうがみくくんとふり
くておくしくれしこまびくくそむけて
そくあひくくちふくくちぬくくよ我

紅のはぞのかさねの
裾ぐちいとをかしくて我ぞいはでぐ
きうせうとなりぬ、これ行ふときくに
念仏の僧とも来りあつまりて大をと
ぐいさ三昧堂へとて
ちかく射れまとてきつくとれく
いたくうはうさてゆうさそひ
せうしとかきは世中はてはいふ物の
あはれをしらぬ男ひのでめて我
を恋めとぬきもひくごとくすゐ惟光さう
すまでかりみぢちて出ぬとて境入ほ
そはるうちそうみちていくそはひ
所非えんはひして清水の観音よ大悲
をたてうれんよも仏と念ずるだけ
らまつ二条のいんとうあちをいくや
こ所へどうちよおりかうびすうるふ
しもうどこやはつくんぐ夫人
下ぬはうれかて為くく長月かわまうこそ







若草　三

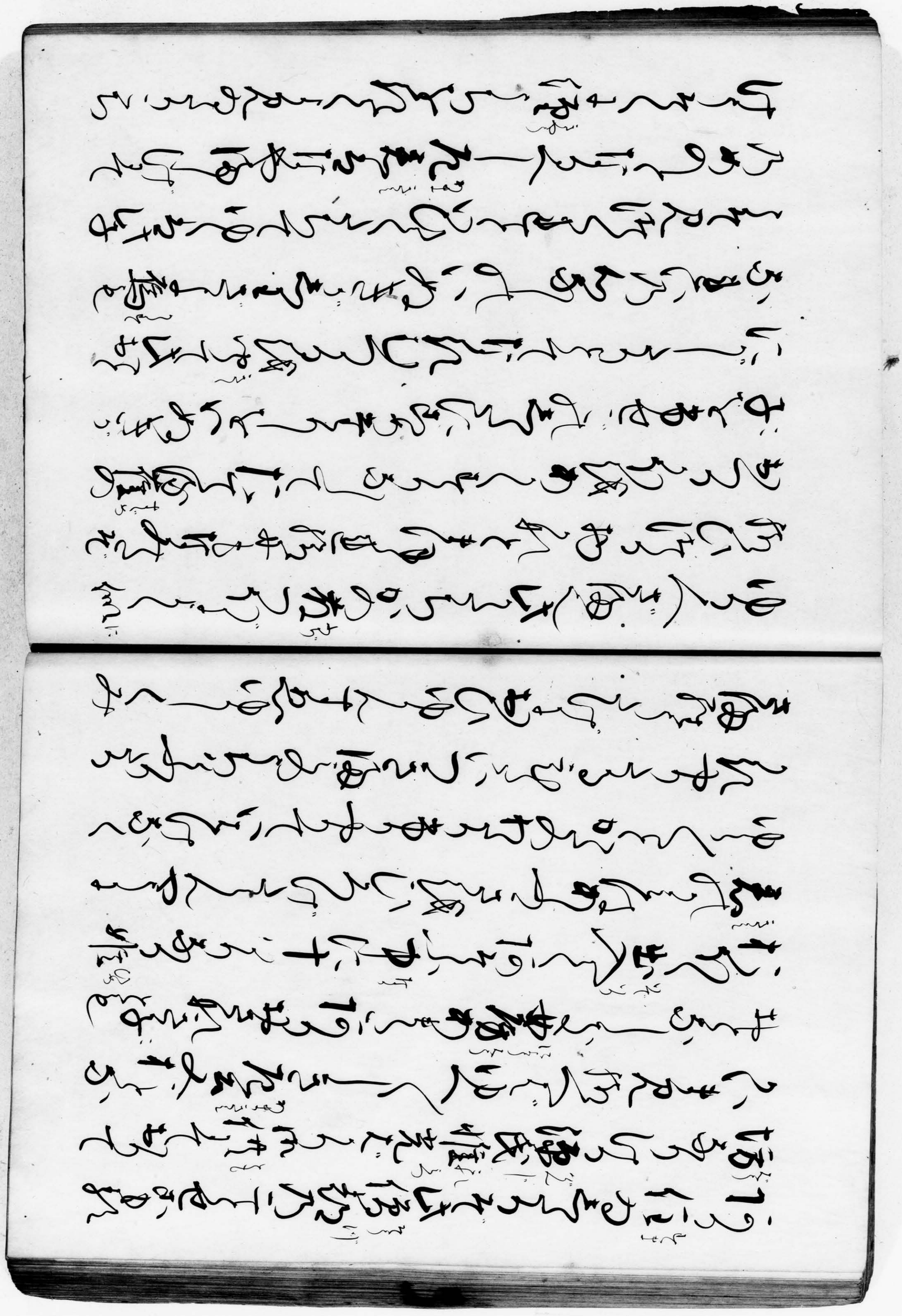
わゝはゝこにうつしひろくうつしゆゑ
なひらぎあてさいはせまんでさるなく
てゆきたびとあるまてゝ　ちよあるい
ほ氏おうとをうつひまるゆあれ人ゝ
やゝ小山のうゑゝ　きてふとうろやゝ
ゞてゆゝなひゞうゞゝゆゝまは
ちゞうゝゝ　ゆあうゝゆんうてゆうとうてゝ
ん見ゆうとゆうゝひうゝうゝ老

かゞまりて立乃ア丑もえ出ゆゝぬゝゝを
うゑゞゞこのひゝゝゆねうゝおりまは入をてゆ
ちうゝゆゝに龍乃ゆたゞきゆ丑をゆゝく
みゆうこ月ゆゞゞうゝゝゝ赤の花いみ
ゆうゝゆゝ桜山のゆゝゆうゝゆうてい
乃ゝゝゆうゝうゝゆゝをいてゆれゝ
ゆゝゝゝ山ゝゆゝ岩の中にゆゝいゝう
ゆうゝけうのうゝゆゝゝれかゆゝうふて
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

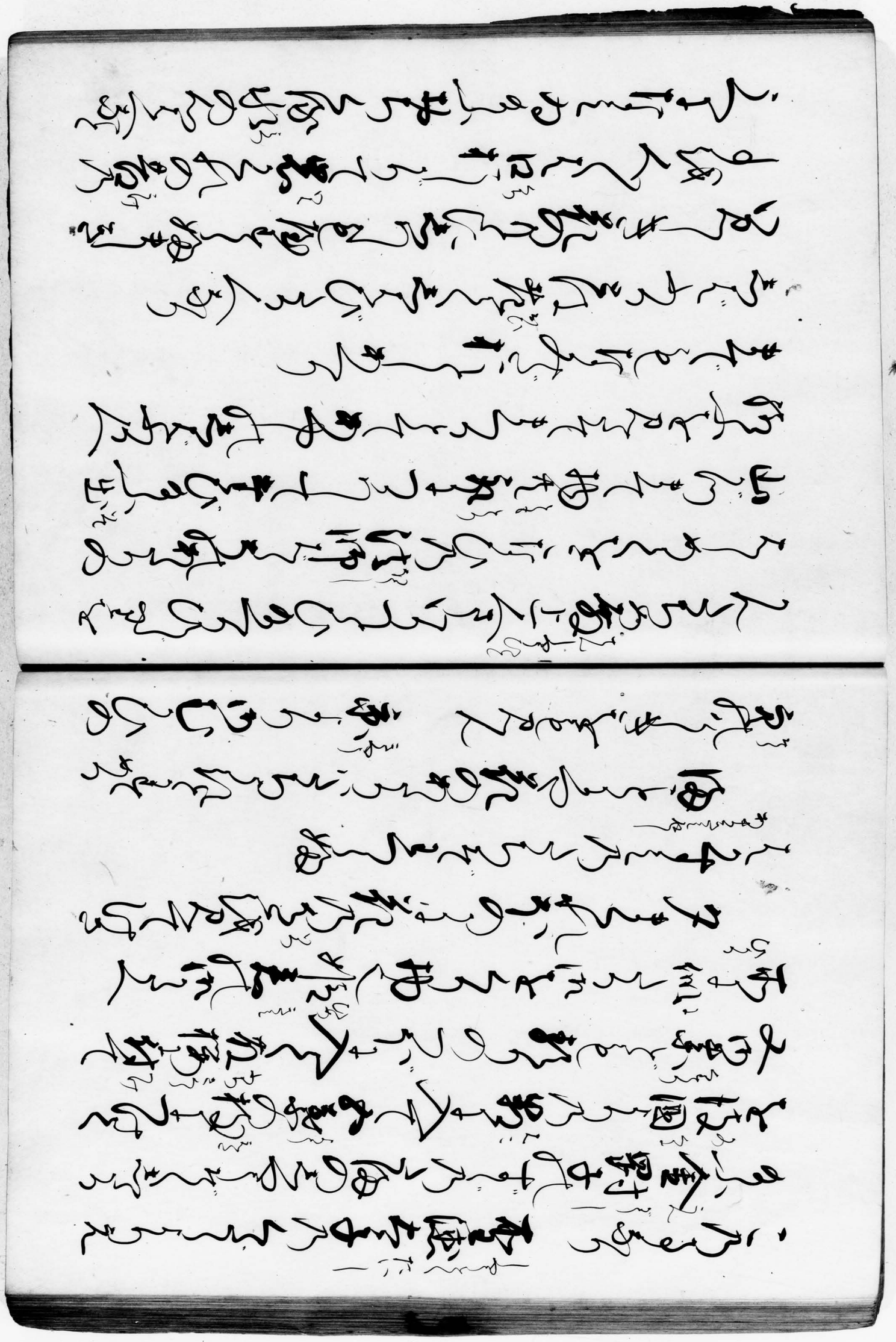
[illegible]

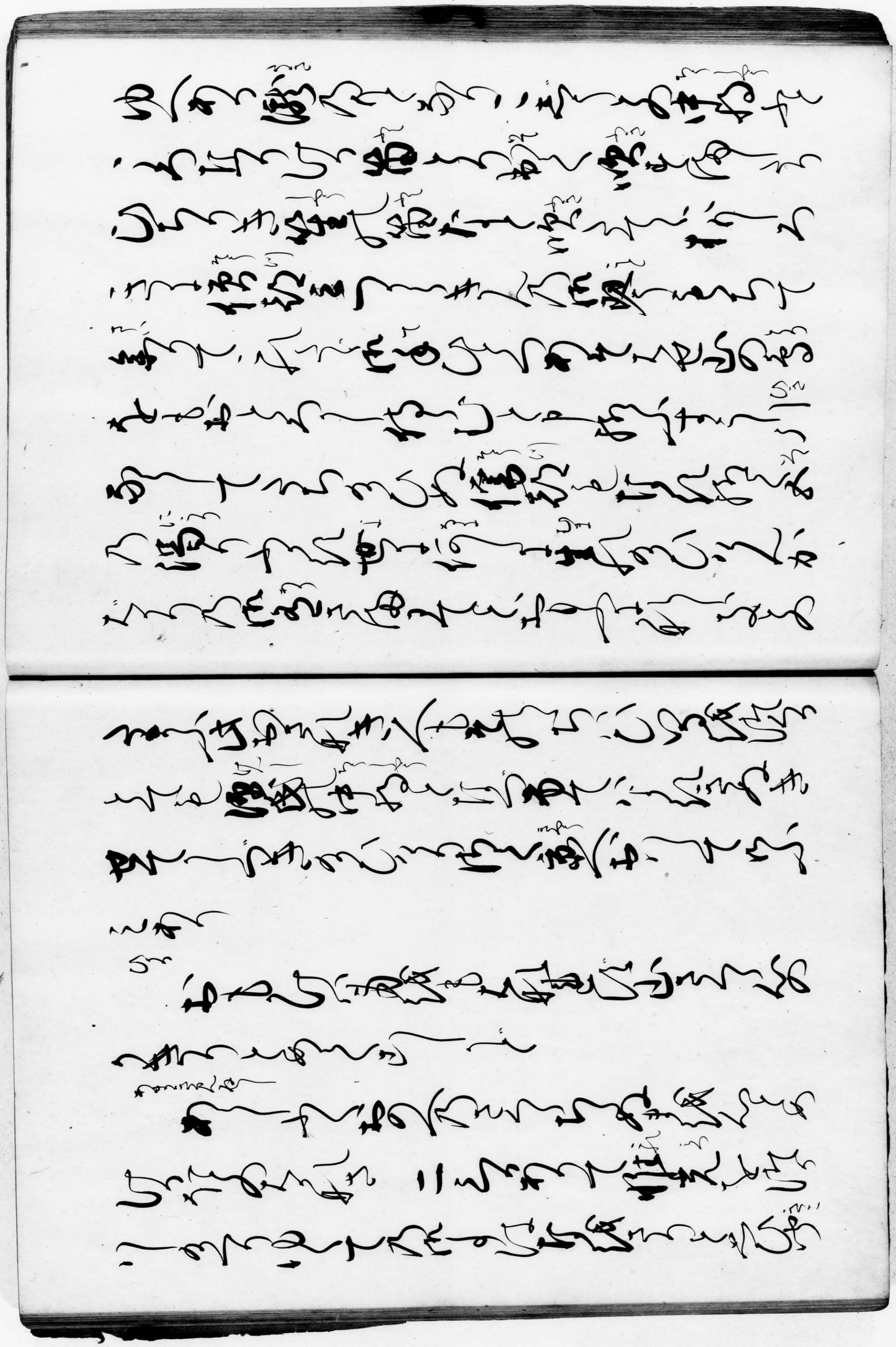
[illegible]

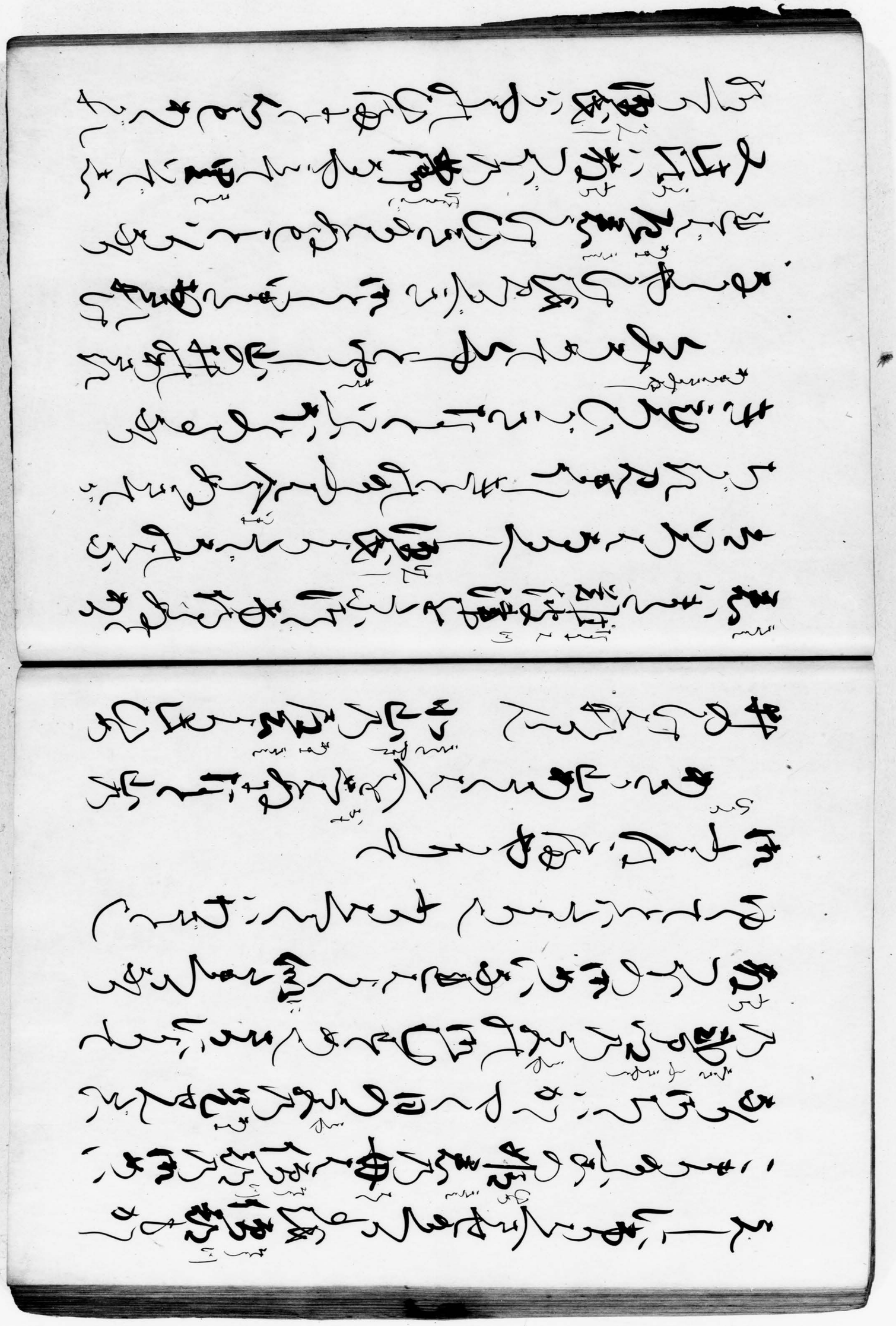


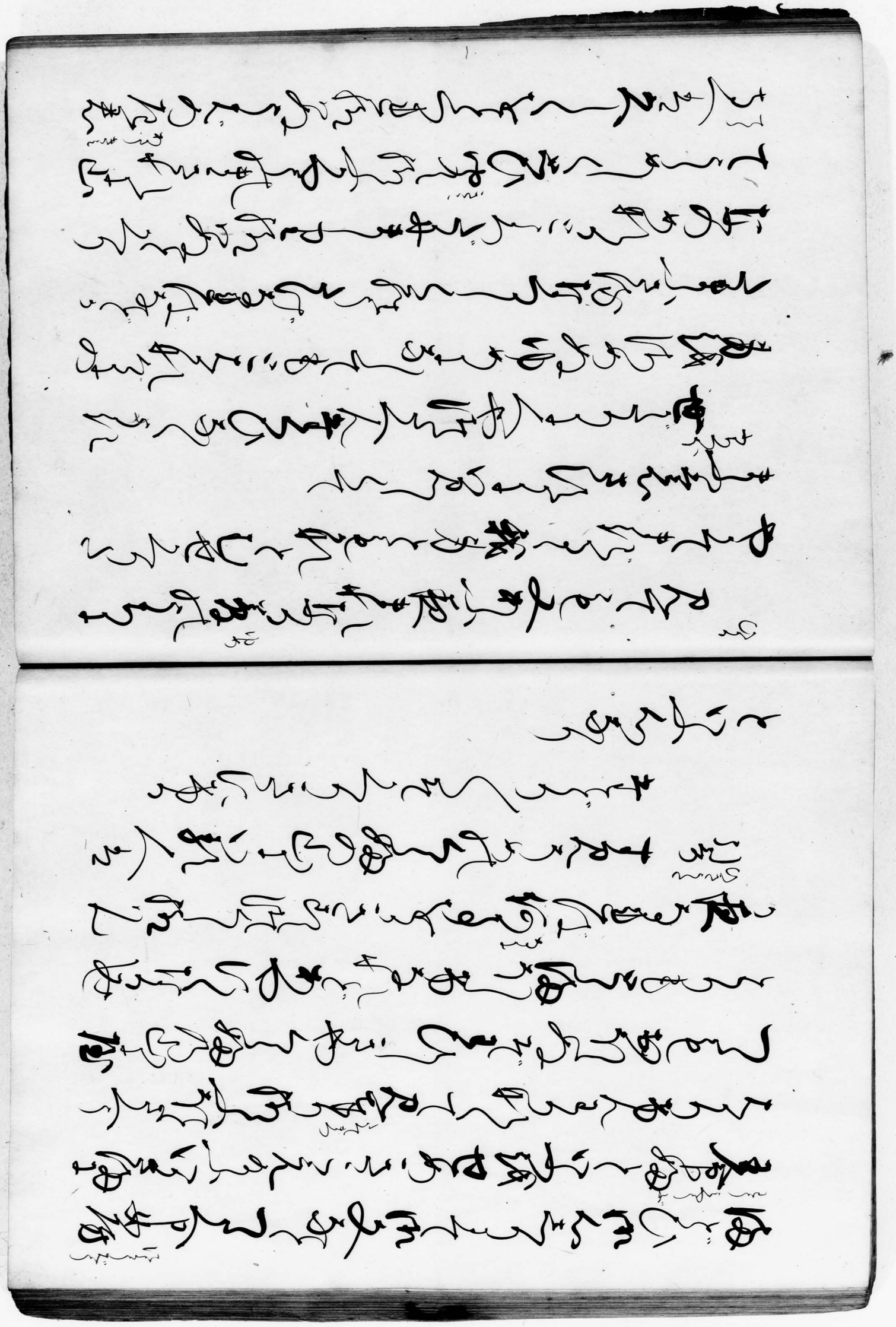
[illegible]

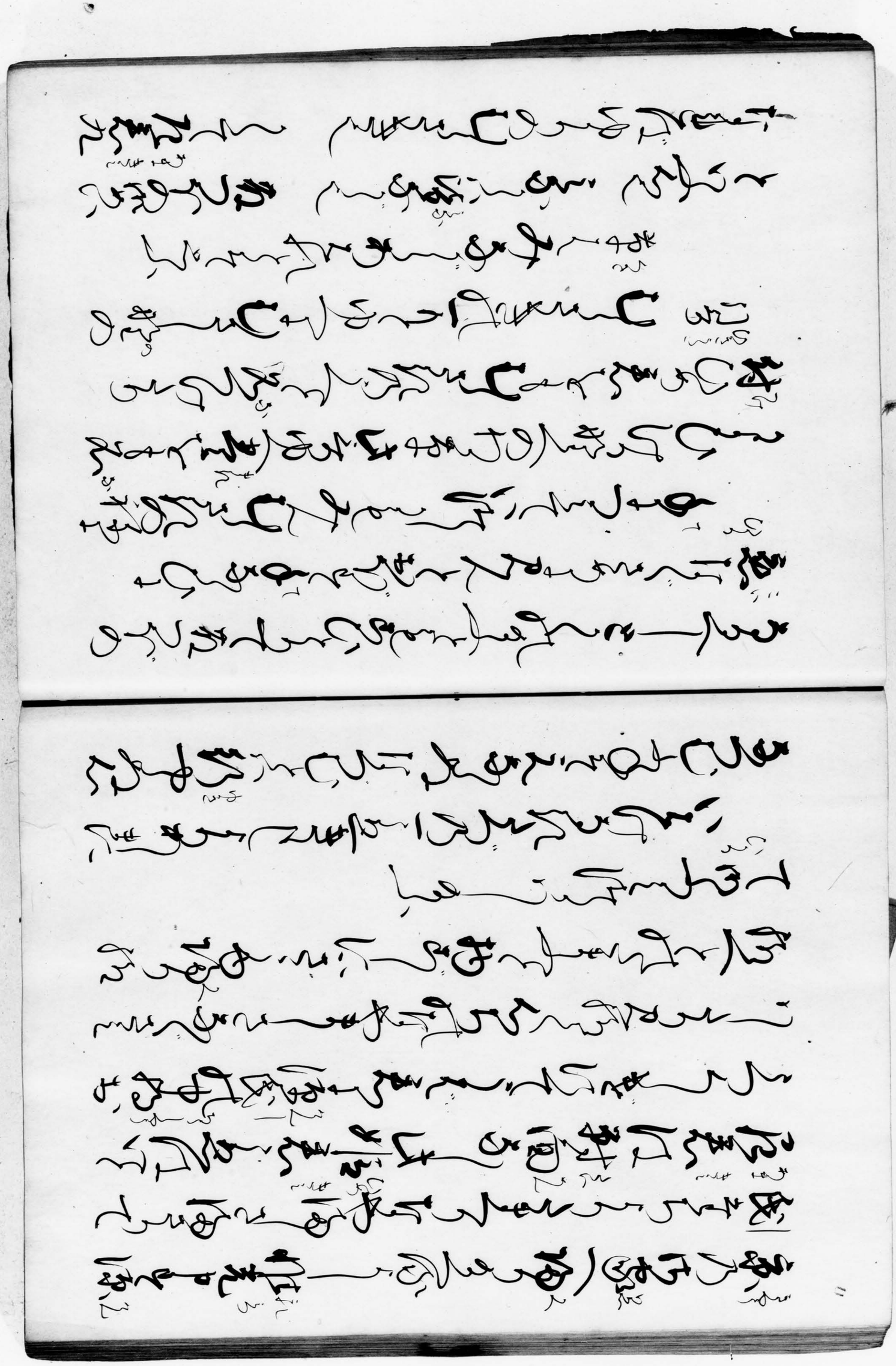
昔ものがたりに
法乃師をしたがひ
ものいみ心ふかく
夢さめて涙
をとゝのほしてあ
くるに袖のつゆ
ぬれぬ
ねざめやはまれ　さくらはな
ちりぬるかぜ
うらもとも　ふきうらんとも
うらゝかに心ものどかに
そこはかとなくものあはれなるほ
いりあれはさうぶもこゝろうとけてあ
高人に行くかたん山伏
ぬしにこゝてもみるべく
ものもしぬれもちえぬんとして
みゝさくらよりてゝ　とまりゆふ
ひさるゝ　ひかりてゆきつゝ行ひ
もゝ山の松のふかさ　ゆきてゆ
ゐれのゐ　みゝ　むこゝろ　ゆまれ
とて　ゆきこゝてもつゝ　ものはこゝ

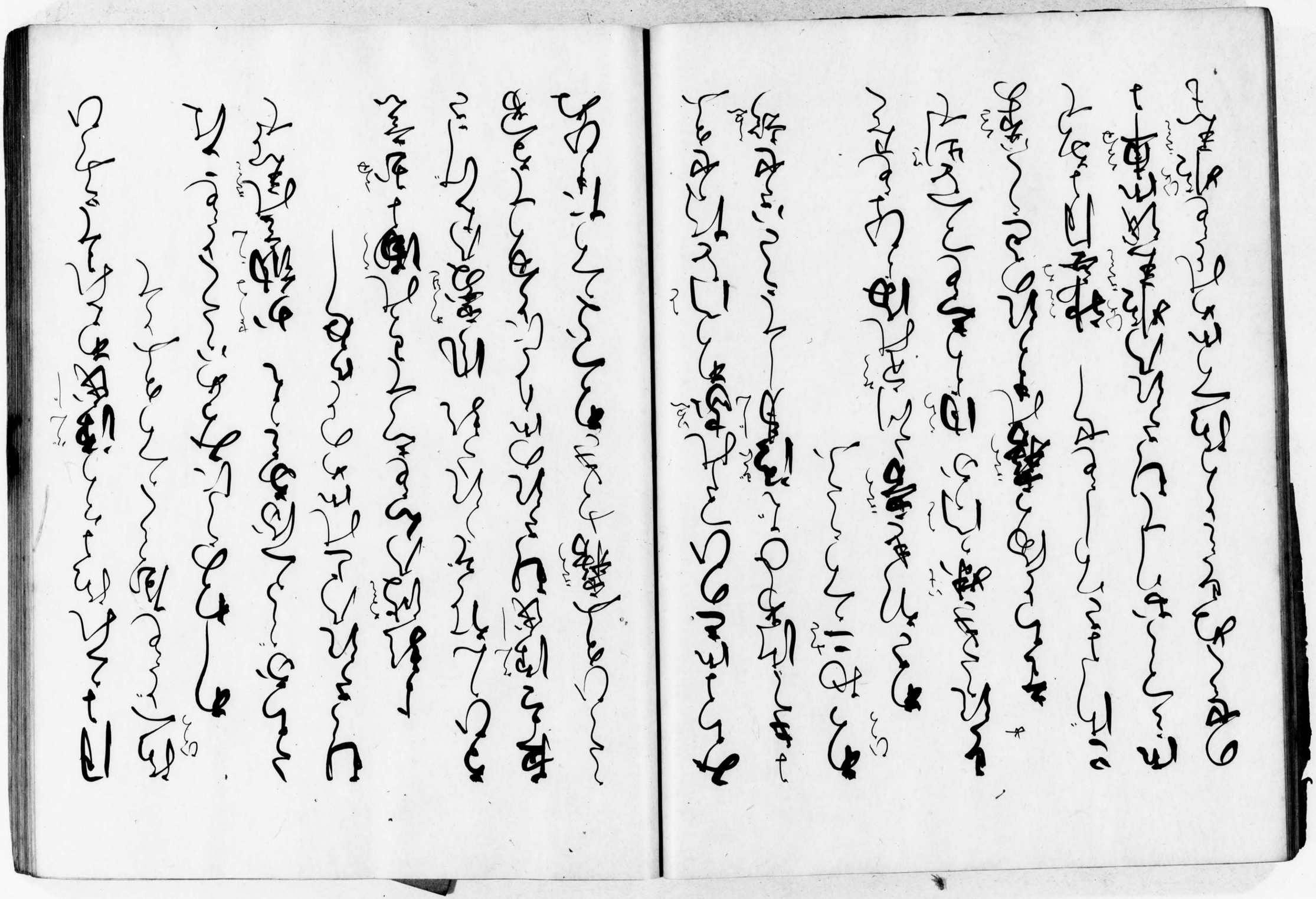


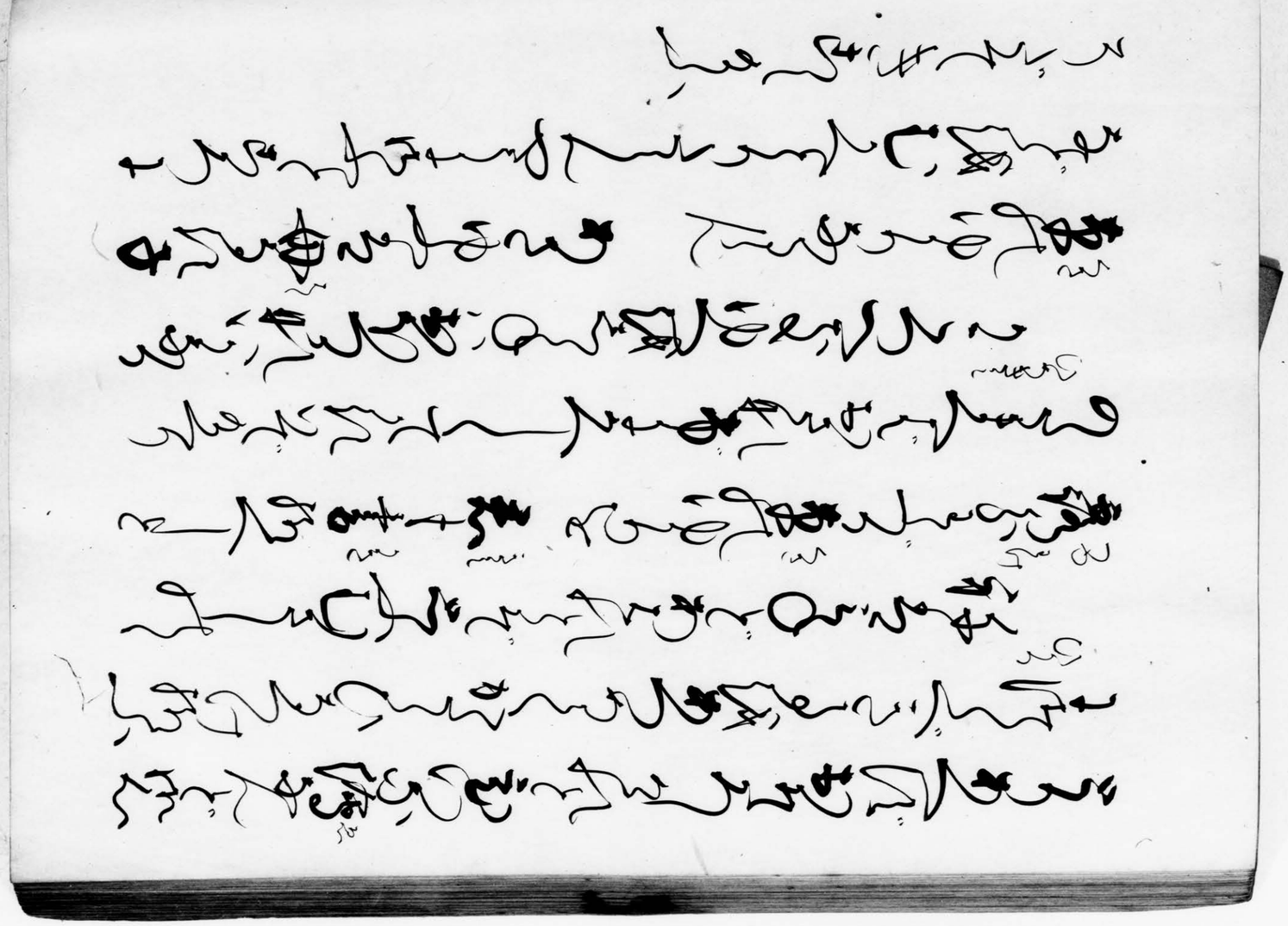


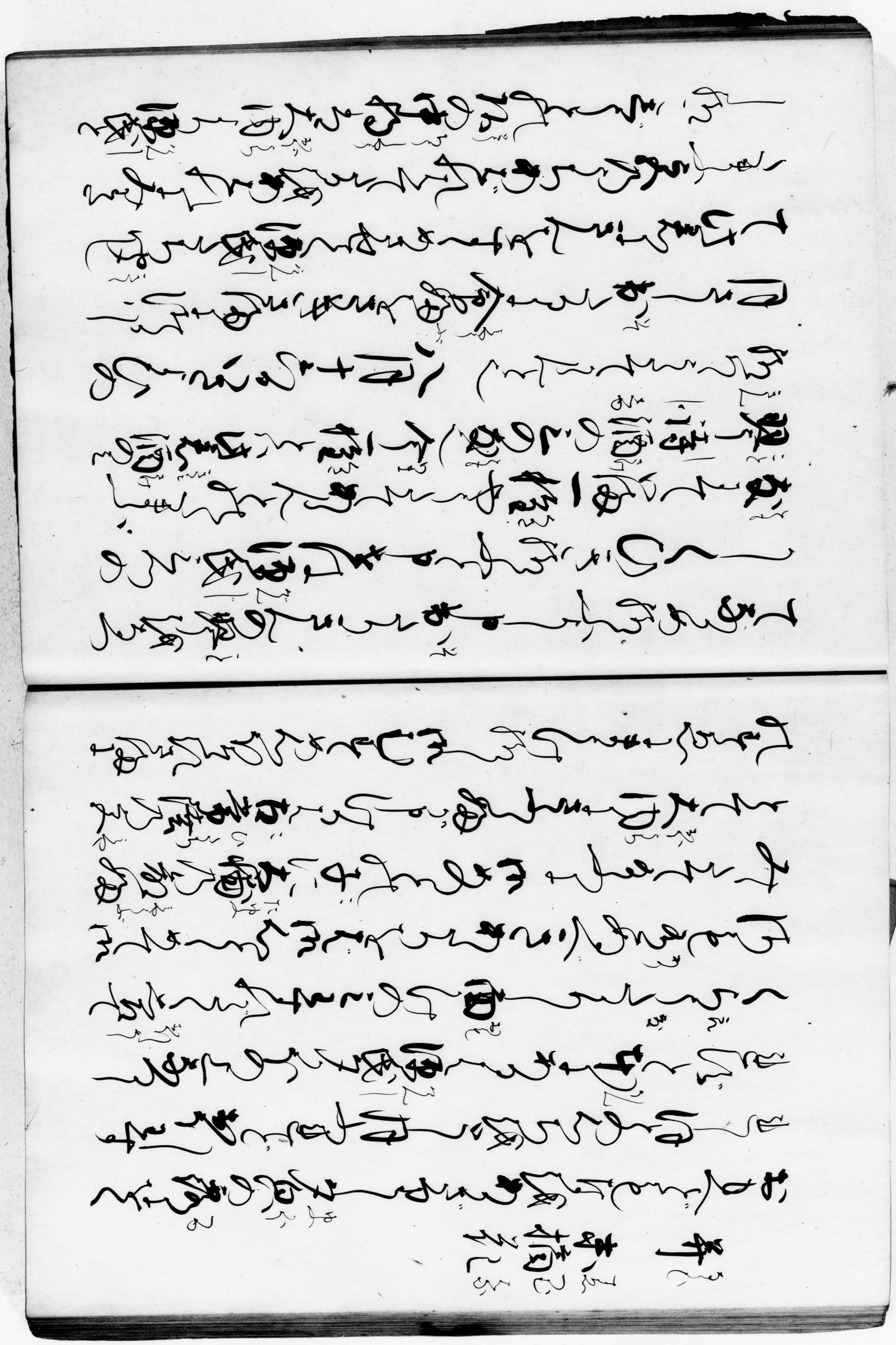


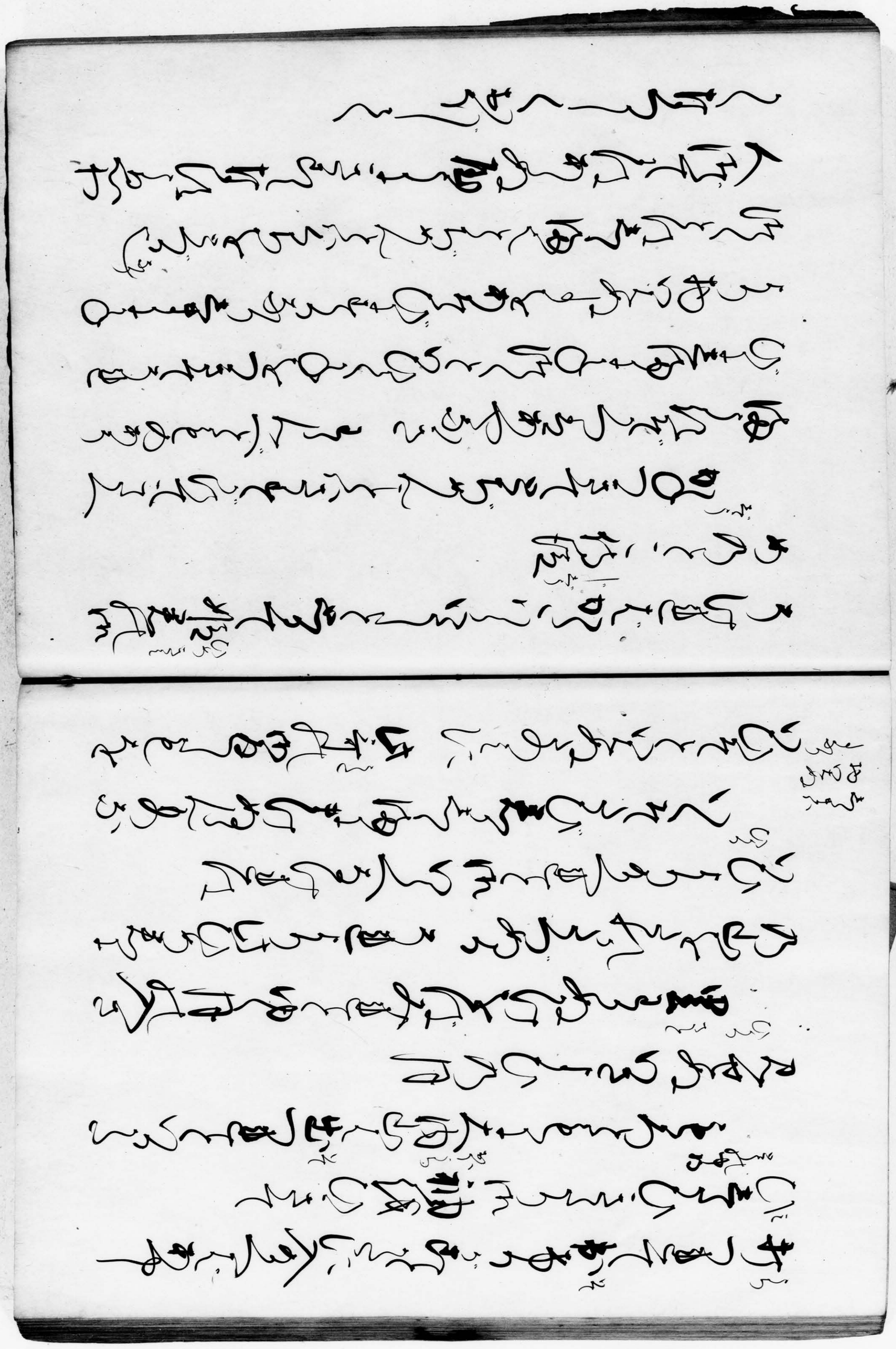


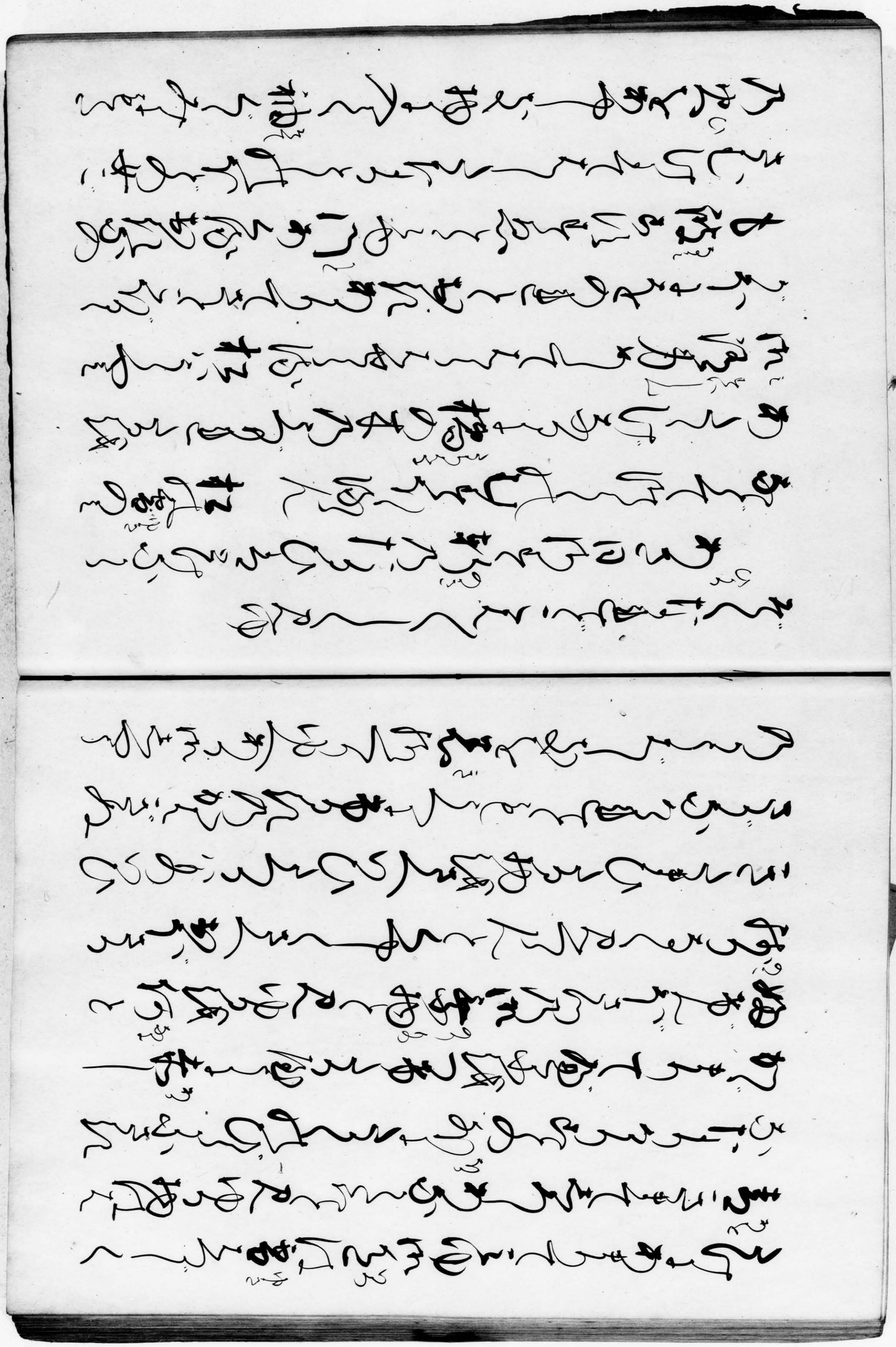


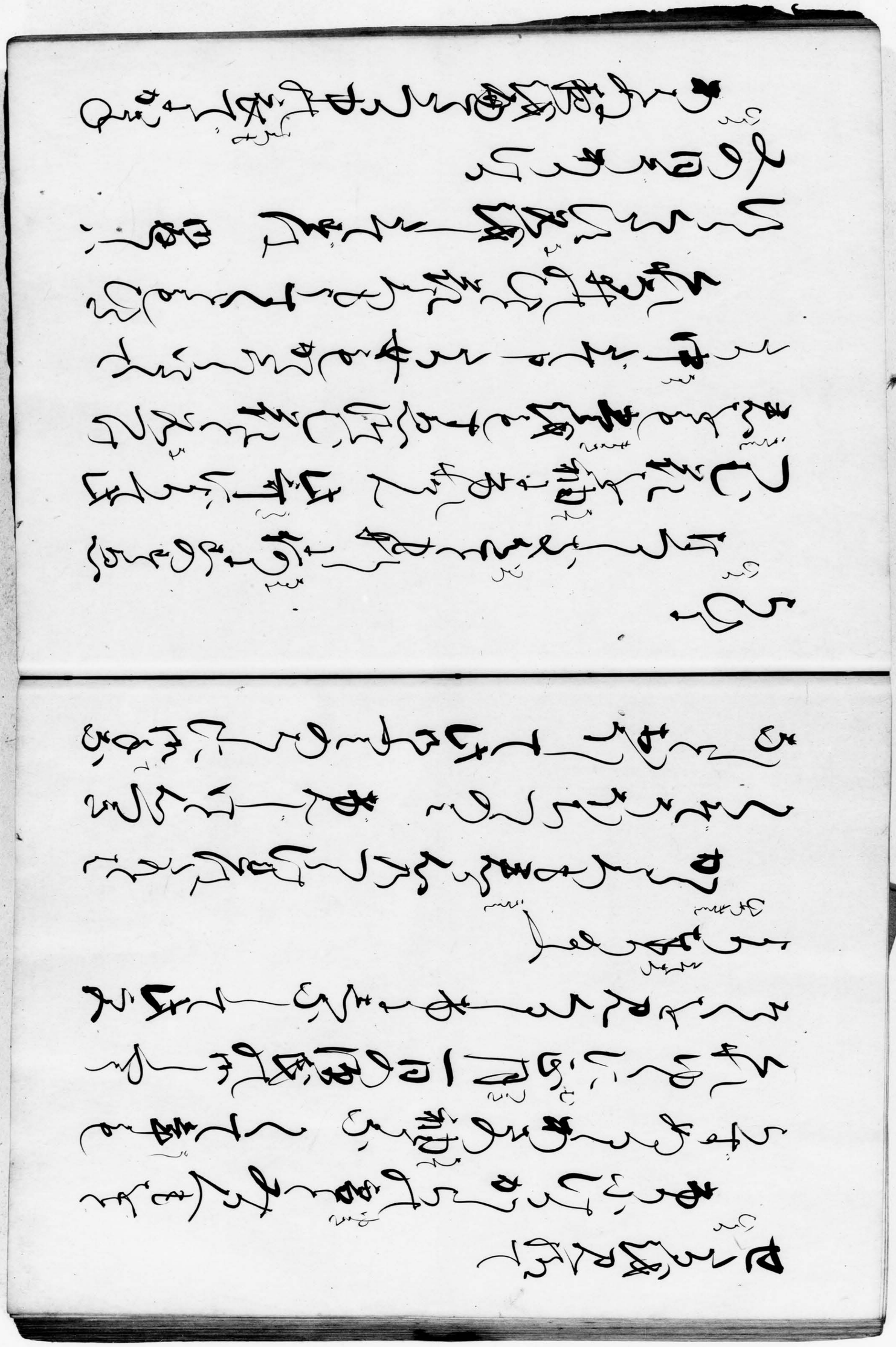








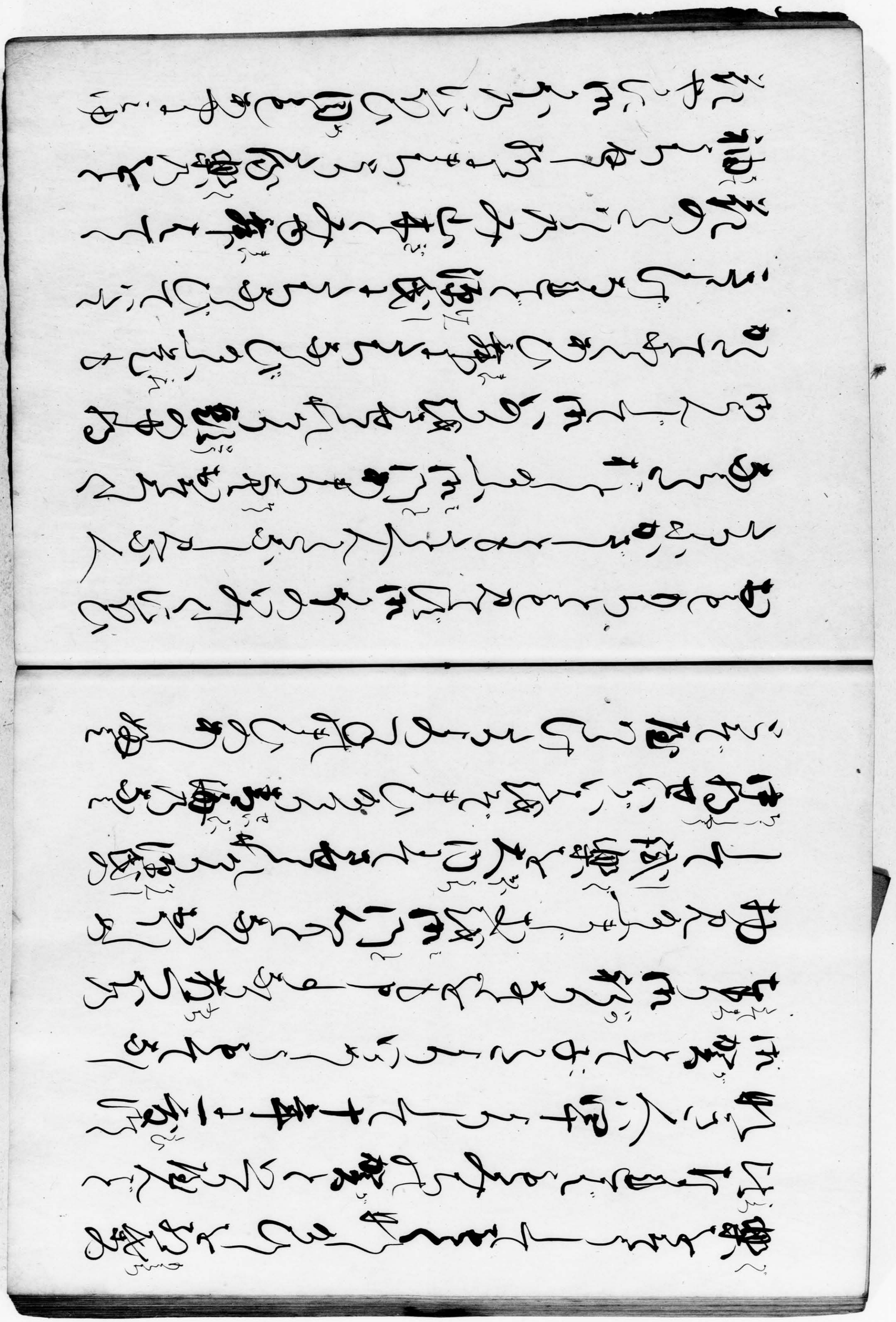




てゝ凡りみよとや　みの日しされの
姫君乃れりくしく例の忍きうこう
給とて御ゝ成源氏れたれよつもて
凡そ乃ゝしれ新ゝうこうこゝろ髪ふ
きゝ女をゝうこうこうて大ゝ
給ふゝうれてもゝ凡まう源氏れれ
ゝ御ゝ成それこひてけふこそ
孫とれゝまゝしひゝれのゝけもやを
凡んとゝやうげこそみちのく紙と硯

ゝ乃れ給よゝめゝてのこひこそまつゝ
源氏中仲ゝゝゝ成ゝゝゝふ赤
凡んゝ成ゝゝとたゝふまゝ
中仲ゝそれゝゝゝ好ゝ乃男ゝ
乃て女にけゝゝゝと凡ゝんゝて常ゝ祝
ゝれゝゝよゝめゝとゝゝれゝゝゝ女ん
てゝ乃ゝれゝれゝすゝゝとゝゝゝゝね
中仲おゝひゝゝゝて例のゝにゝよ
めゝてゝれゝゝ成みゝく女よゝゝ

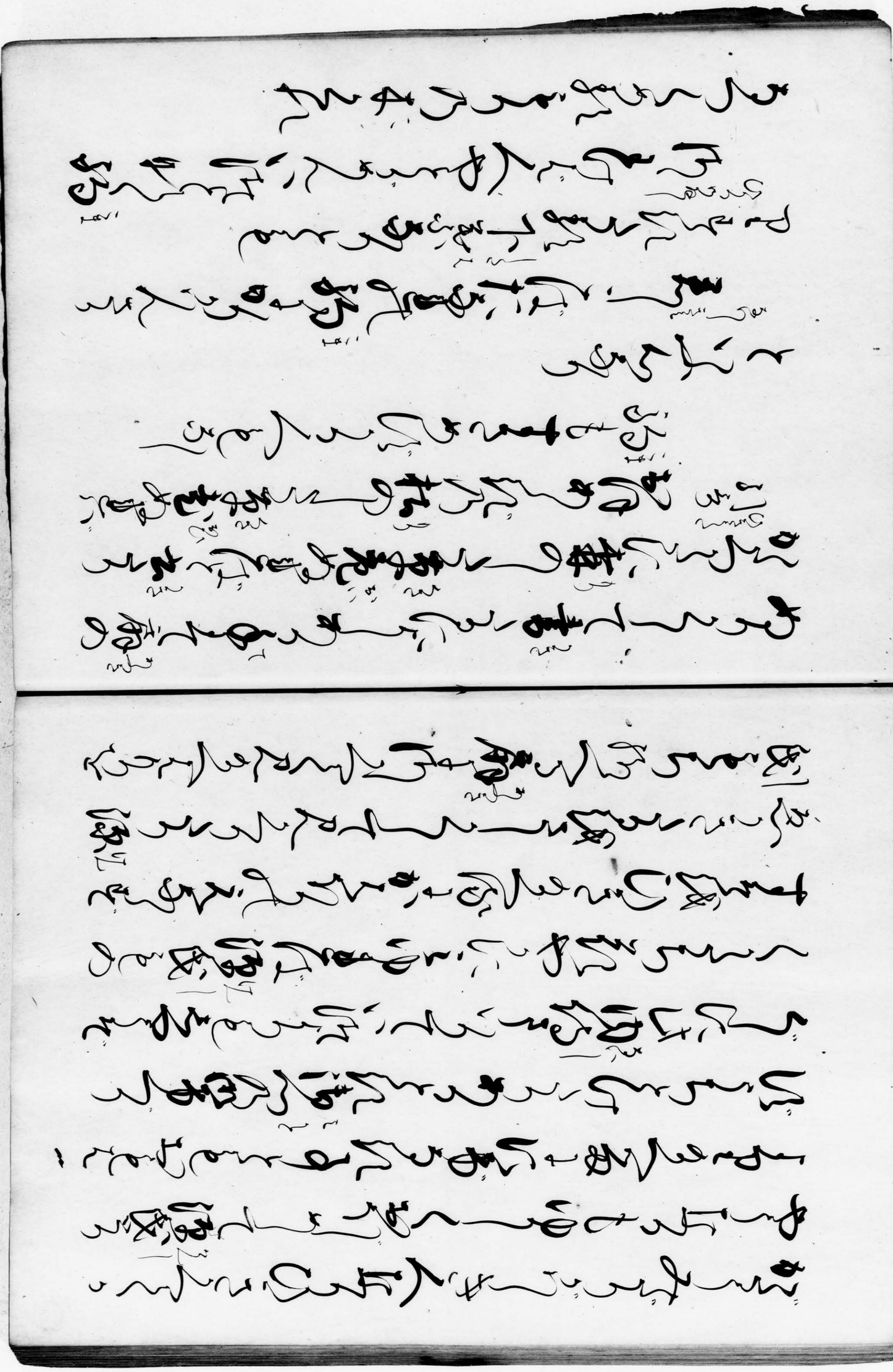
わたにはそつてさんぜんすれども人な
すとはくるかのくるふよとよみすれわ
ゝ
ゝ
ゝ

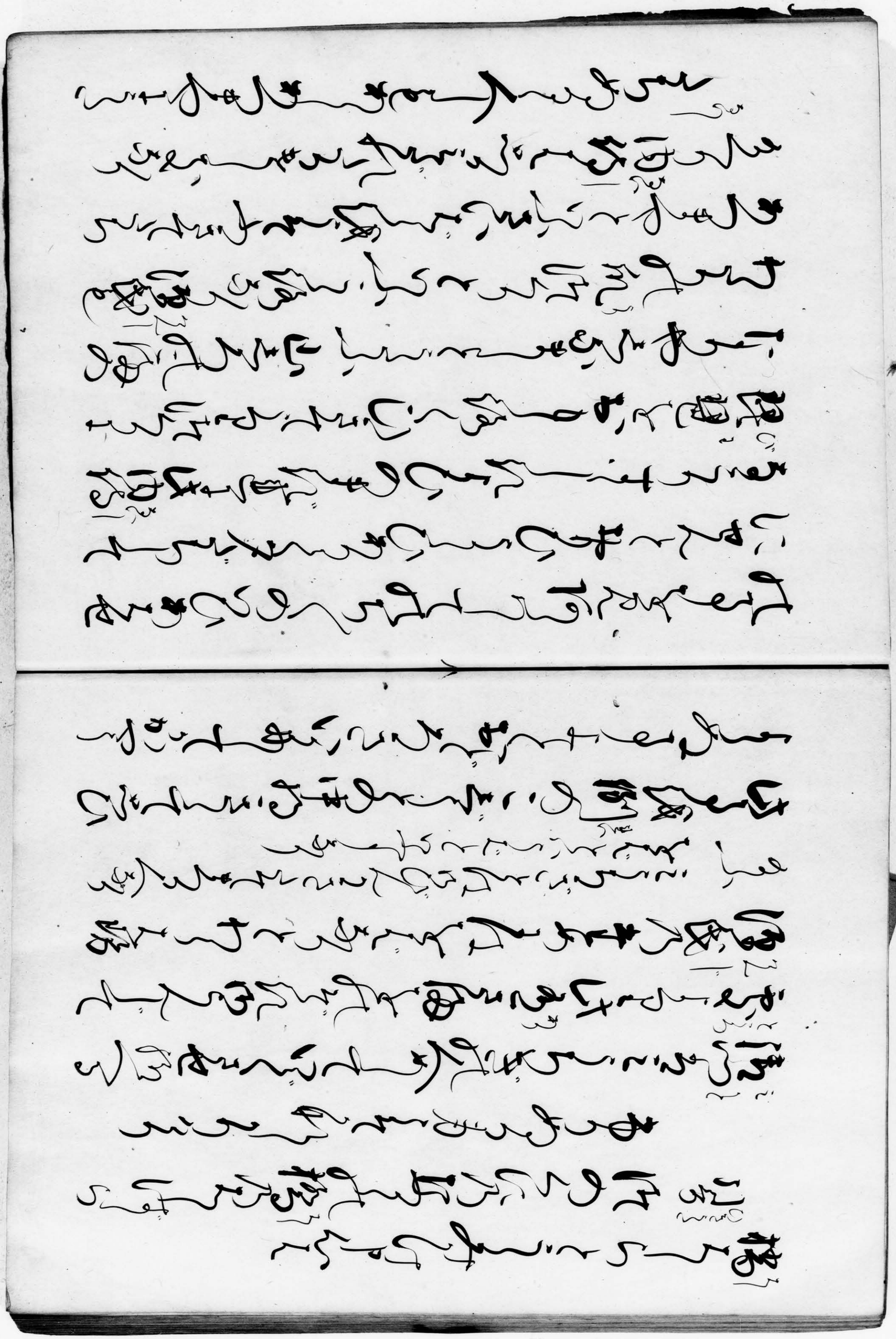


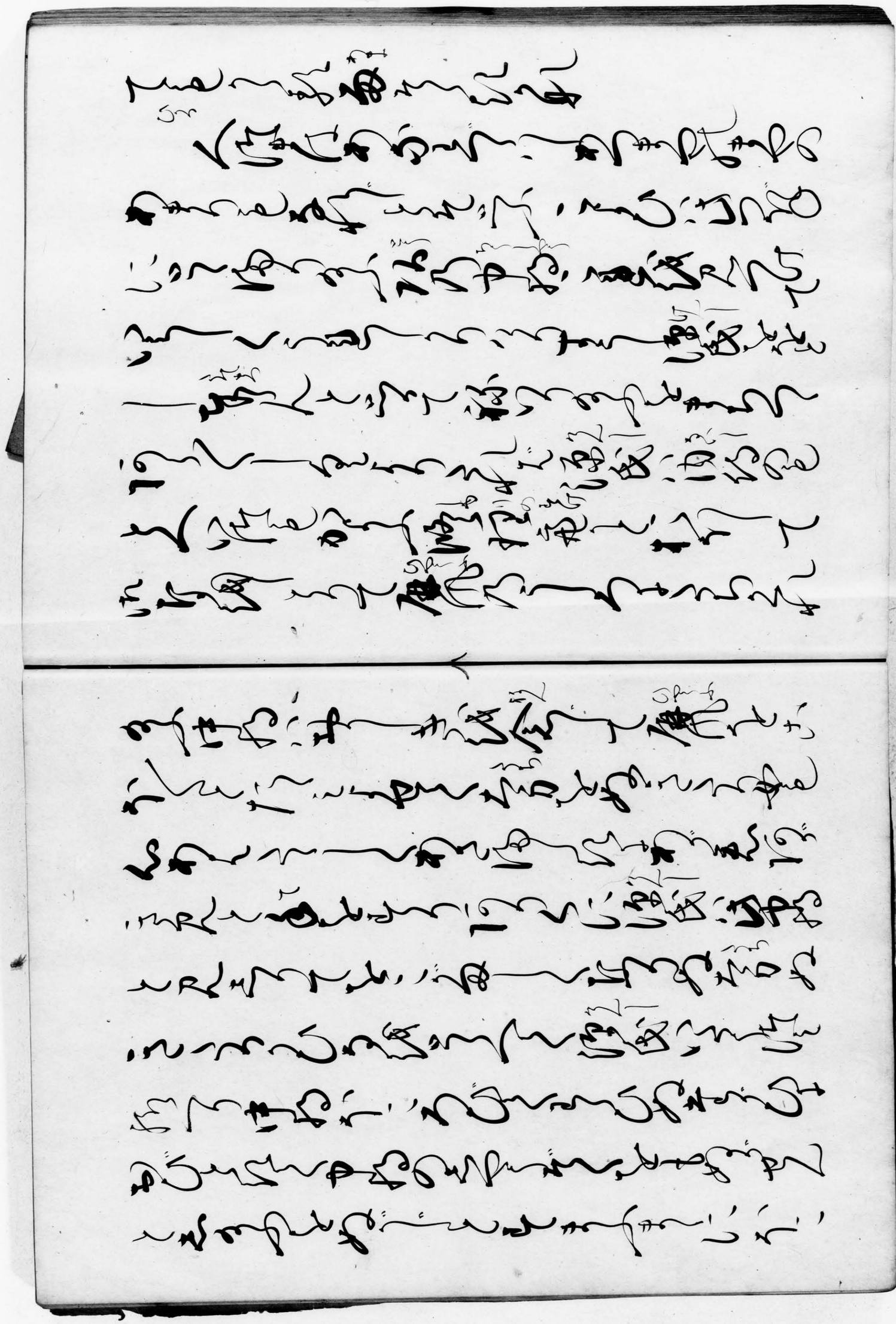
[illegible]

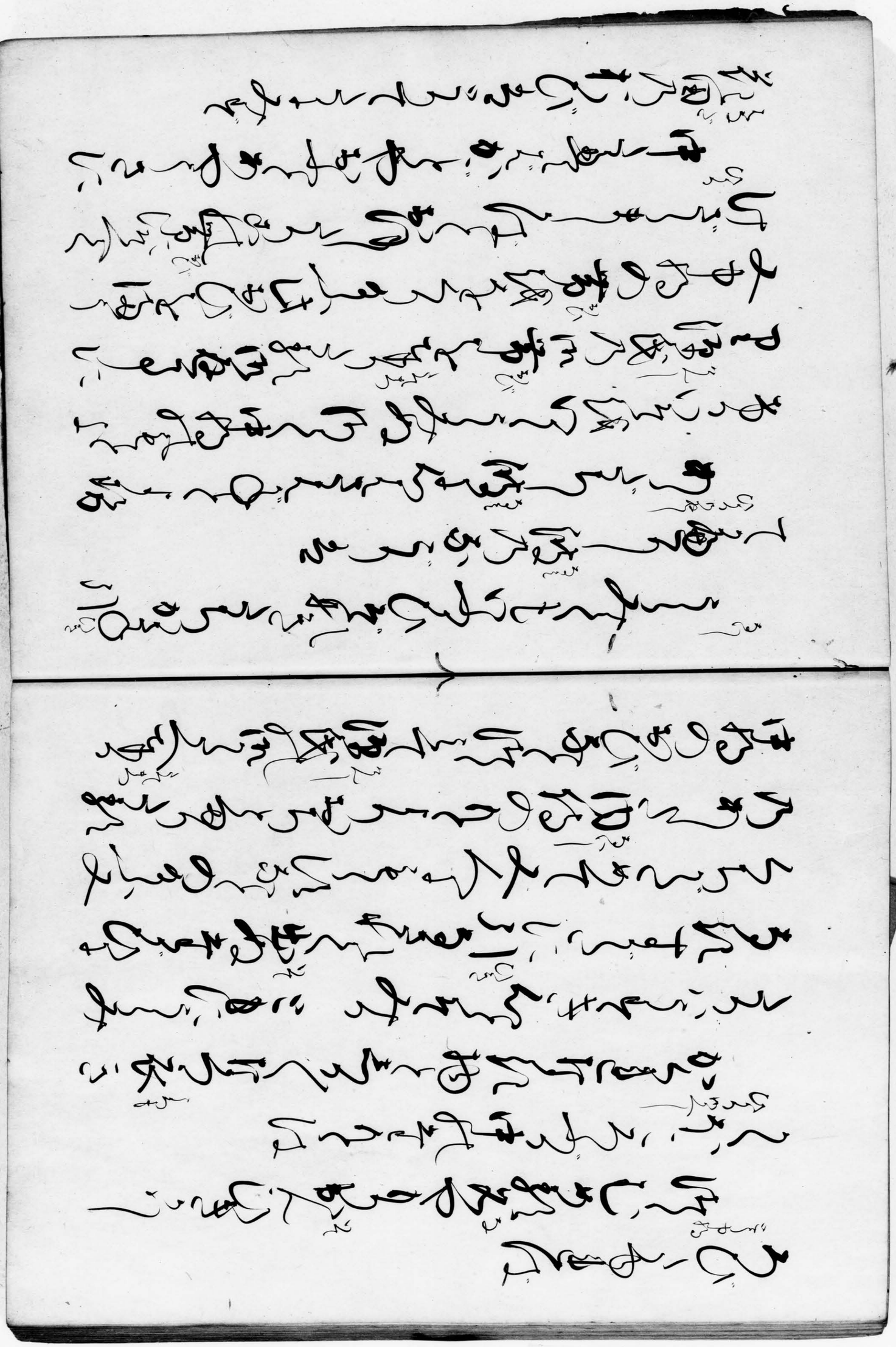
[illegible]

[illegible]



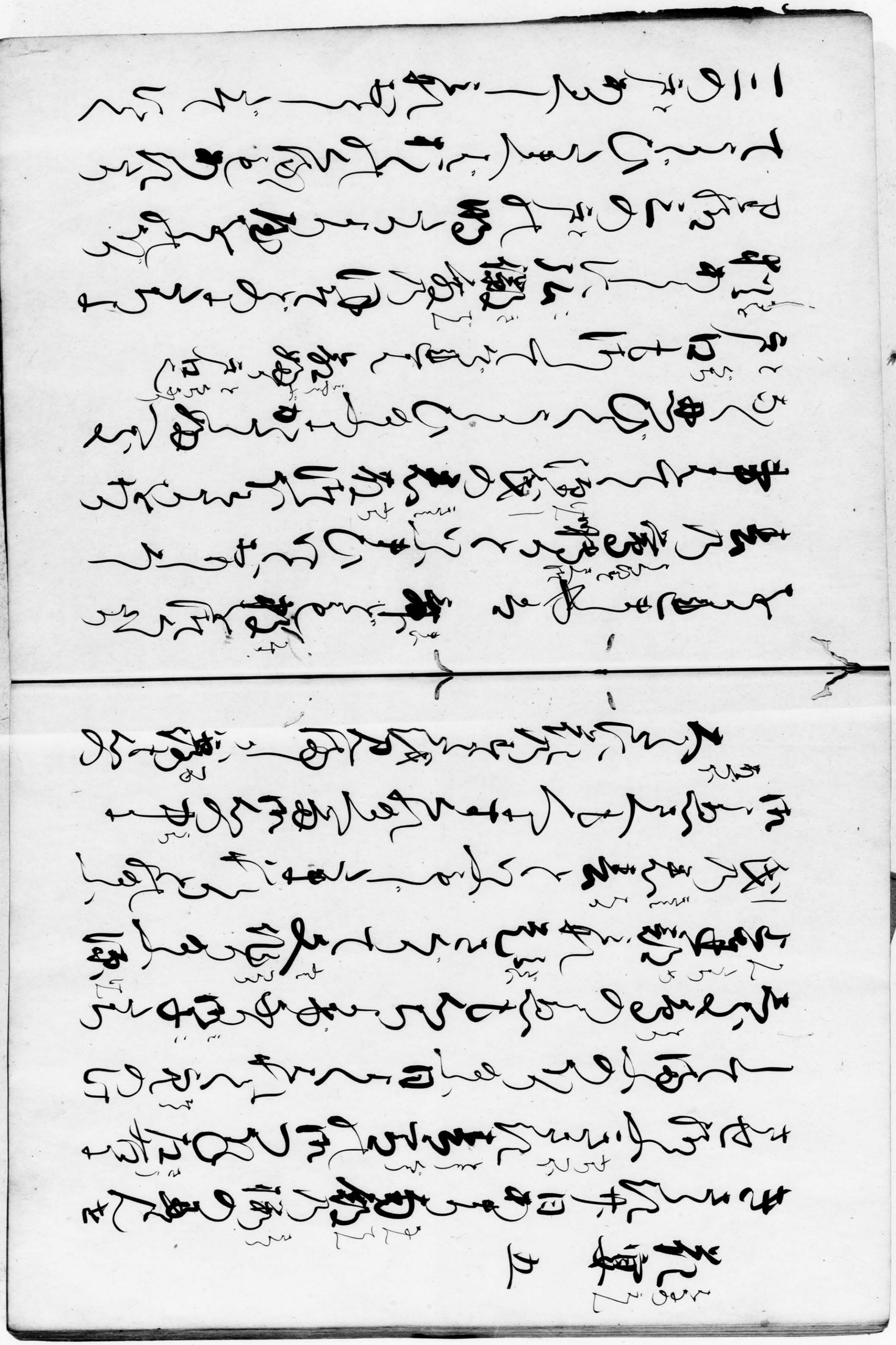






まつかくしきとしめる常るもじ
かくてこそあるゆゑかこそたん
石川といふこそに石川乃こゆ人よ常を
うらもとかれくるすまいるるもびそ
とれとれおびの中ハこそこそふるう
うのんぬるあうう　みきさ弘徽殿乃
御門とおもてあつかの后さらのへと
ゆうへとゆくくはるはれとて
はきもとあんのやにうるしそ丹よ

人をみるつもて



[illegible]

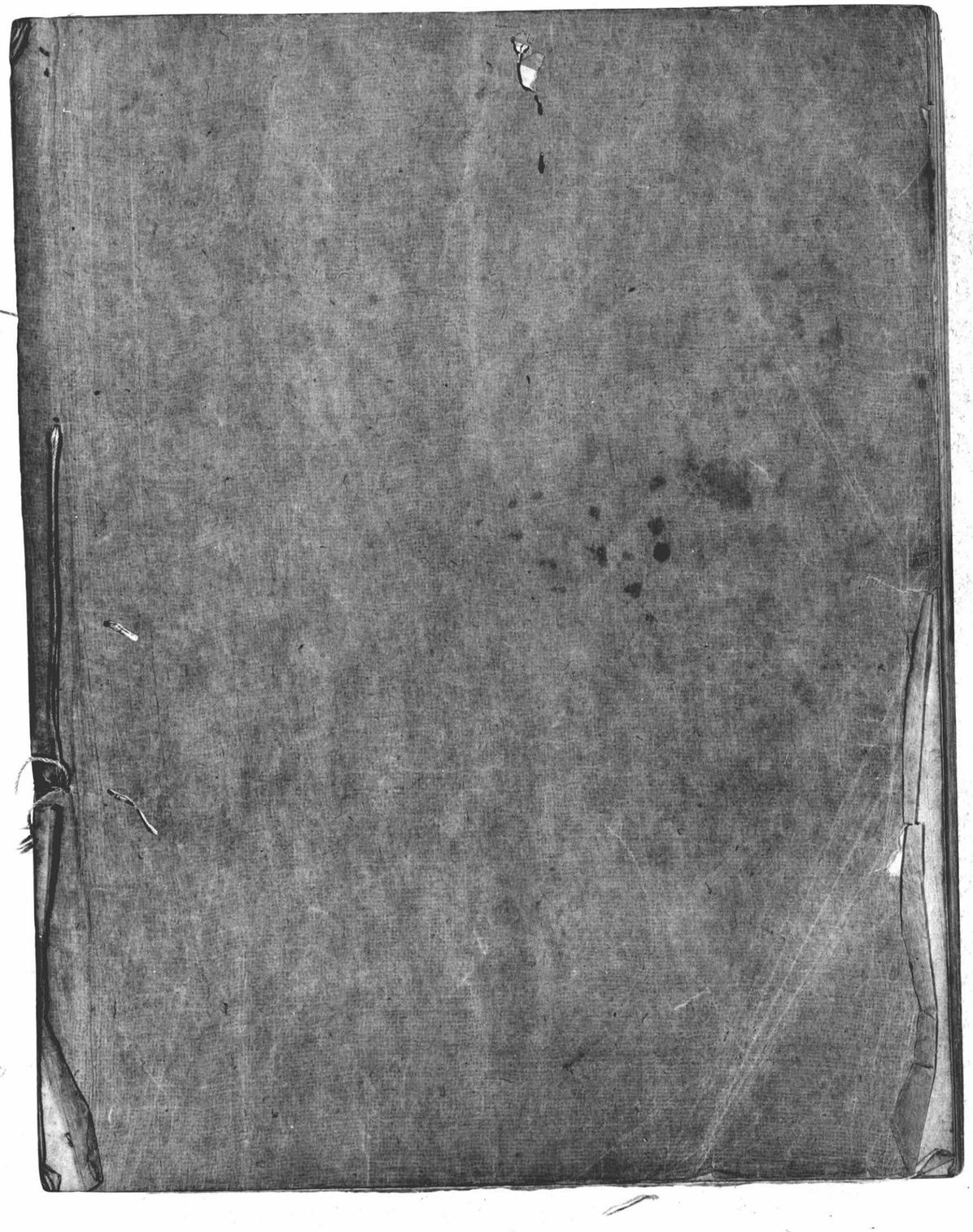
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九州大學圖書印